
あなたがくれた宝物

らい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたがくれた宝物

【NZコード】

N1063D

【作者名】

らい

【あらすじ】

自分も他人も愛せない来は、小学生の頃から腐っていた。人並みの感情も持てず、両親を恨み、自分の事も大嫌いだった。でも、そんな来が運命の人、伸に会つ。伸に会つてから、来は少しづつ変わって行く。人を愛する素晴らしさ。人を信じる大切さ。伸に出会つてからの来の人生は驚くほど、変化して行く。一人の相手を愛し抜く来…。

ねえ、みんなは自分の事が好き?
私は自分が大嫌い。

顔が嫌い。

性格が嫌い。

声が嫌い。

髪の癖毛も、爪の形も嫌い。

とにかく自分のすべてが嫌い。

私、^{かみきたらい}上北来は自分を愛せない自分が大嫌い。

もうすぐ21歳になるというのに、自分すら愛せない私は、男の人を本気で愛せないまま21歳の誕生日を迎えるとしている。
でもね、こんな私でも、何人かの男の人と付き合つた事はあるんだよ。

全然続かなかつたんだけど。

この人となら…って思つて付き合つても、すぐに面倒臭くなつて別れた。

彼氏に束縛されるのも、毎日の電話も私には苦痛でしかなかつたんだ…

嘘も平氣でついちやうし、私という人間は本当に最低なんだと思つ

…。

それだけじゃない… 小学校からやつてたバレー ボールもなんとなくやつていただけで、上手くなりたいとか、試合に勝ちたいとかそんな事を思つて練習を頑張つていた訳じやないし、いつも辞めたいつて思つていた。

こんな奴が、キャプテンやつてるなんておかしいつて！

とりあえず、上北来は小学校の頃から腐つていたんだ…

私にとって、学校も、バレー ボールも、恋愛も全てがどうでもよかつた。

「こんな可愛氣も何にもない私は、両親からも嫌がられていたんだと思ひ…」

まあ、私も小学生の頃から、両親が大嫌いだつたけど…

両親の離婚、再婚、家出。うちの両親はいつも近所の噂の中心にいた。

そんな両親の子供だから、ひねくれるのも当たり前。自分のこのどうしようもない性格は親のせいだと、親の事ばかり責めていた。

だけど、私が、あまりにも他の子供と違う事に自分で気付いていた。ひねくれた性格だけならまだしも、私には感情がなかつたんだ。花を見ても少しも綺麗と思わなかつたり、みんなが悲しいというテレビを見ても、どこが悲しいのか、分からなかつた。

私は、生きていて何か楽しい事つてあるの？そんな疑問を持ちながらも、なんとなく生きていた。

仲に会つまでは…

「来、今日、俺んちくるか」

夕方、最近一番仲がいい男友達の蓮斗から電話がかかつて來た。

「うーん、どうせ暇だし行こうかな」

「オイオイ、俺んちは暇つぶしで來んのかよ」

「まあね…何？今日は行かない方がいい？なんか用事あるっぽいけど…」

「俺、ちょっと家にいないけど、勝手に上がつてて」

「うん、分かった、んじゃ遠慮なく」

「他に誰か来たら宜しくな」

「了解、きちんと留守番します」

何にも知らない人が聞いたら、蓮斗と私の今の会話は、きっと彼氏と彼女の会話なんだろうね（笑）

でも、全然違うんだ！蓮斗は私の友達の直が好きなんだもん。

蓮斗に直を合わせたのも私。

中学からバレーをやっていた蓮斗とは学校は違つたけど、顔見知りだった。その蓮斗と、二ヶ月前に居酒屋のカウンターで隣同士になつたのがきっかけで、連絡を取り合つようになつた。

お互い、付き合つてる人もいなくて、寂しい者同士、週末には遊ぶようになつた。

私は20時頃に蓮斗の家に着いたけど、蓮斗は勿論居なかつたし、蓮斗の友達達も誰も来ていなかつた。今日は帰らうかなとも思つたけれど、そのうち蓮斗も帰つてくるだろつと、私は一人で待つことにした。

蓮斗の部屋つて、離れにあるから、蓮斗の両親には全然会う事がないんだよね。

それが、ここに着やすい一番の理由だつたりもする。

「来、来、まつたくお前起きるよ」

「あ…蓮斗」

うわあ、あまりの暇でにじうやう眠つてしまつたらしい…

寝ぼけ顔の私の目の前に、見た事のない男の人が立つていた。

その瞬間、私は硬直してしまつた。同時に、自分の心臓の音が私

のすぐ近くに立っている蓮斗に聞こえたんじゃないかなと焦っていた。

私は、この瞬間に恋をした。

生まれて初めての一目惚れをしたんだ。

私の人生最大の恋が始まった瞬間だった。

「蓮斗、彼女が来てるなら言えよ、そしたら遠慮したのにさ…」

「え、伸、勘違いだぜ、こいつはただの友達」

「だつて、ただの友達が留守中の蓮斗の部屋で寝てるかよ、普通」

「それもそうだな…来、普通じゃないから」

「へえ、伸君つていうんだあ。

それにしても、カッコイイ！茶髪のサラサラヘアにすりついた体型。

一見、悪っぽく見えるけど、優しい目をしている。

なんでだろう…

私は、なんでこの人をこんなに愛おしく思つんだら…

でも、もしかして、私、蓮斗の彼女だとおもわれる?

しかも、思いつきり寝顔見られてる…

うわああああ、なんて最悪な出会い片をしてしまつたんだ…

私は突然、パニックに陥つた。

「来、何一人でブツブツ言つてんだ」

「え、あの、あ、ごめん」

「ん？来、もしかして、伸がいるから緊張してんのか？まさかなあ…来が緊張するわけないよな」

「だつて緊張くらいするから！」

「まあまあ一人さん、夫婦喧嘩はそのくらいにしてくれよ

私と蓮斗の会話に、伸君が挟まってきた。

「私、本当に蓮斗の彼女じゃないから」

私は、必要以上に必死だつた！

その姿に、蓮斗は全てを察した様で、伸君には私と蓮斗の関係を、私には、蓮斗と伸君の関係を話してくれた。

蓮斗の話しづまとめると、伸君とは大工の学校で知り合つたらしい。あ、蓮斗は大工さんなの。まだ、見習いみたいな感じらしいけど。そして、伸君も大工さん。伸君は宮大工なんだつて。二人とも働きながら、土曜日だけ、学校に通つてるんだつて！ その学校で仲良くなつたつて事みたい。職人かあ… ますますかつこいいな。

私は、普通の会社の事務員だから、なんか羨ましい。

もつと、もつと、伸君の事知りたい！

「蓮斗、酒買つてきたぞ」

「お、陸矢、サンキュー」何？今から飲み会なんのお！

陸矢の手には大きなスーパーの袋。

その中には缶ビールや酎ハイが沢山入つていた。

陸矢は蓮斗の幼なじみ。初めて蓮斗の家に遊びに行つた時、陸矢もいたから、なんか普通に仲良くなれたんだけど…… 今は、ほんのわずかな幸せを邪魔されて、陸矢に腹を立ててしまつた。つて、陸矢は何も悪い事してないんだけどね。

「何？陸矢今から飲むの？」

私きつい口調で聞いた。は伸君とのたつた数分の楽しい時間を邪魔されて、かなり不機嫌だつた。

「え、来、なんで機嫌悪いわけ？来、酒、命だろうに」

陸矢！伸君の前で余計な事言つなつて！酒が命だなんてありえねえつて。

私は思いきり陸矢を睨みつけた。

状況を読てめない陸矢は

「今日の来は怖い怖い」なんておひやらけてた。

結局、伸君とは、

会話らしい会話は全然できずに、飲み会は始まつてしまつた。

そして、つい、いつものペースで飲んでいた私は、ほどよく酔いが回つて、眠気に襲われた。

「来、眠いんなら泊まつていけよ」

いつもなら、なにも迷わず泊まつて行くのに、彼氏でもない、蓮斗の家に泊まるなんて、伸君にどう思われるんだろう？ そう考えたら、泊まれなかつた。

「蓮斗、今日は帰る」

「何言つてんだよ、こんな夜中に危ないから、泊まつて行けよ」

「いいよ、大丈夫だつてば」

私はそう行つて帰ろうとした。

「来ちゃん、俺らも泊まつて行くから、泊まつて行つた方がいいんじゃないかな」

伸君が優しく声を掛けてくれた。

そして、私は、蓮斗の家に泊まつて、翌朝、みんなが目覚めないうちに家を出た。

私は、自分の部屋に戻ると、頭は伸君でいっぱいだった。

誰と付き合つても、本気になれなかつた私が、恋をした。一日惚れなんて、絶対するわけないと思っていた私が、一日惚れをした。生きていれば、いつか楽しいことがあるのかと疑問を持ちながら生きていた私が、たつた一日が、いや、たつた一晩が、すぐ楽しかつた。

その日から私は、伸君の事が頭から離れなくなつた。会社でも、家でも、友達と会つてる時でさえ、伸君の事で頭がいっぱいだつた。

毎日毎日、週末になるのを、今か今かと待つていた。

そして、待ちに待つた週末。いつものように夕方、蓮斗から連絡が入つた。

「来、今日も来るだろ」

「うん、行くつもり

「直もくるつて行つてたから」

「へえ～、蓮斗、直誘つたんだあ…やるねえ」

「つるさい、まずは後でな」

蓮斗、いよいよ攻撃開始だな。

正直、あの二人はお似合いだと思うし、直も多分、蓮斗に好意を持つてると思うんだよね。

私、そういう勘つてすごいんだ。観察力だけは人一倍いいみたい。

私は、思いもよらない残業で少し遅くなつたけど、待ちに待つた蓮斗の家に着いた。

心臓がドキドキしそぎて、口から出できそう。

私は、蓮斗の部屋のドアを開けてびっくりした。す、すごい人数。

今まで、見た事がない人もいっぱいいた。

蓮斗の部屋は広いから、これだけいっぱいの人が入れるんだあと感心してしまう。

「来、こつちこつち」

久しぶりに会う直。相変わらず可愛いな。

「お、直、久しぶり、蓮斗とはどう? 告られた?」

「冗談で行つたつもりだつたんだけど… 直は急に顔を赤く染めた。ま、まじ? 蓮斗、見かけによらず行動早!!」

「さつきから、付き合いだした」

直は最高に幸せそうな笑顔だつた。

「来も、頑張りなよ」

「え? 何が?」

「私は、今日初めて会つたけど、伸君の事、気になつてるんでしょ」

「蓮斗に聞いた?」

「うん、来の行動見てたらすぐに分かつたつて言つてたから」

私は、我に返つた。

あまりの人数の多さに伸君来てるか、まだ確かめていなかつた。あんなにドキドキしながら、来たのに何やつてんだろ私。

「伸君、今、たばこ買いに行つたよ」

私がキヨロキヨロしていたから、直が教えてくれた。

「来ちゃんつて言つの? 僕、大輔でこつちが、裕弥、んで、一番奥にいるのが、太一、宜しく」

「あ、どうも」

今日、初めて見る人が、自己紹介してくれたけど、ほとんど頭に

入ってなかつた。

今は、伸君に以外の男の人はどうでも良かつた。
私つて、本当に最低。

「お待たせ！」

き、来たよ！待ちに待つた伸君だ！

顔を見るだけでも勝手に心臓がドキドキする。

え？誰？伸君の後

ろから女人人が入つてきた。

もしかして彼女？なの…

私は一気に地獄へ突き落とされた様な気分になつた。

伸君の隣には、さつきの彼女が座つてゐる。 それからの私は、
なんとか普通でいた。

あまりのショックで泣き出しそうだつたのを必死でこらえた。

あんなに、伸君に会うのを楽しみにしてたのに、ろくに顔を見る事
もできない。

なにやつてんだろ私。

今まで、付き合つてた人を平氣で傷つけた罰なのかな…

そして、私はあの場にいるのが絶えられなくて、先に帰つてしまつ
た…

一週間前に一目惚れをして、恋をした。

まだ、恋が始まつて一週間なのに、私は失恋をした。

失恋……私は、必死で伸君を忘れようとした。
まだ、傷が浅いうちに忘れなきやいけないとthought。

でも……全然無理。

無理だ。どんどん好きになってしまつて。苦しくて、苦しくて何も手につかない。…

そして…

気持ちの整理も全然つかないまま週末が来てしまつた。

行けない…

私は、蓮斗に再会してから初めて、週末に蓮斗の家に行かなかつた。

そして、携帯電話の電源を切つた。

蓮斗から、必ず連絡が来るから…

ごめん、蓮斗。

伸君と彼女が一緒にいるのを見たくないから行かないなんて、かつて悪くて言えない。

嘘も平氣で言えちゃう私が、この日は嘘も見つからない。

私は、一人で居ると頭がおかしくなつてしまつ…そう思つて、高校に入つてからの親友、由那の家に向かつた。由那にはなんでも話せた。

直以上になんでも話せてしまつ。

なんでだろ…

やつぱり、同じ部活でいつも一緒にいたからかな。直とは同じクラスだつたけど、部活は別だつたから…

由那の家に着くと、びっくりした顔をしながらも、とりあえずは何も聞かずに部屋に入ってくれた。

「ごめん、由那、今日デートだよね」

由那には中学から付き合つてゐる彼氏がいる。毎週末に必ず会つてゐるから、さつと今日もデートのはずなんだ

分かつていながらも、来てしまった。

由那は携帯電話を持つて、部屋の外に出た。

「今日は、来の話し聞くから、『テート中止!』

そつか、今、彼氏に『テートを断る電話をしてくれてたんだ。
由那、ごめん。

でも、なんかめちゃくちゃ嬉しい…さすが由那、私になんかあつた
事、見抜いてる。

「…………

「で、何があつたの？あんた、すうい顔してると
「うん、知ってる。だつてどうにかなっちゃいそなんだ
「まさか、好きな人でもできた？まさかね…」

「…………

「え、本当にできた？」

由那はかなり驚いていた。それも、そつだよね。今までの私を全
部見てるからや。

私は、恐る恐る全てを話した。

しばらく由那はだまつていたけど、突然、大声を出した。

「なうんだ！」

なんだつて、私がこんなに切ない話をしてるのに…

「由那、何？それだけ」

「だつて、来はまだ何も始まつてないのに、勝手に終わりを決めた

けでしょ

「え？」

「まだ、伸君と一緒にいた人が彼女なのかも確かめないし、伸君に気持ちも伝えてないのに、なんで諦めようとしてるのよー。」

「由那」

「一日惚れしたんなら、きちんと気持ちを伝える事、それで振られたら一緒に泣いてあげるから」

「告白するって事？」

「あたり前でしょ。このまま終わにしたら、来はもう人を好きになれなくなっちゃうよ」

そう言つて由那は私を部屋から追い出そうとした。

「今から、気持ち伝えて、すつきりしておいで」
口調はきつこけど、由那の口はとつても優しかった。

告白かあ…

まだ、出会つたばかりだからそんな事、考へてもみなかつた。
けど…私は、今の自分が今まで以上に大嫌い。
うじうじ悩んで何も行動に移せない自分にイライラする。

私は決心した。

由那の言つ通りだ。何もないまま、勝手に終わらせようとしているのは私だ。例え、伸君に彼女がいたとしても、自分の気持ちだけは伝えよう…
やれる事をきちんとやってから、終わりにしよう。
時計はもう、23時を回つっていたけれど、私は蓮斗の家に向かつた。

え？？？

私が蓮斗の家に着くと、伸君が外に座っていた。

「なんで、伸君、外にいるんだろ…」

私は、不思議に思いながらも、神様がくれたいいチャンスなんだと自分に言い聞かせて、伸君に向かって歩いた。

もう、私の心臓破裂しちゃうよ。

あまりの緊張に、声が震えちゃう。

落ち着け！落ち着け！

必死で自分に言い掛けた。

私は、伸君の目の前に立ち、大きく深呼吸をした。

「来ちゃん、やつと来た、ずっと待つてた」

待つてた？って言つたよね？何言つてんの伸君。

「え？」

「来ちゃんが、なかなか来ないから蓮斗に、来ちゃんこないのかつて聞いたんだ…そしたら、夕方から連絡がとれないって言つから」

「ごめん、ちょっと…」

「携帯の電源切つてたんだよね？」

「え？あ、ごめんなさい」

「それって、俺のせいだつたりする？」

ええ、もしかして、ばれてる？告白する前に気持ち伝わってる訳？

私は、意外な展開に言葉がでない…

あ、もしかして蓮斗？蓮斗が何か言つた？
わかんないよ！

「蓮斗から何か聞いたの？」

「うん、今日、来と連絡が取れないのは多分、伸のせいだつて言われた」

やつぱり蓮斗か…

蓮斗は単細胞な私の考えなんて全ておみ通したんだ。

「直ちゃんからも、色々言われたよ」

「直かも？」

「来ちゃん、多分すゞい勘違いしてると思つ」

「勘違い？」

「俺、彼女いないよ」

「え？ 嘘…」

「やっぱり勘違いしてるとみたいだね、俺、この前、音葉と一緒に居たのは誤解だから」

あの子、音葉つて言うんだね…

でも、何が誤解？

「んじゃ、その音葉ちゃんとは、なんで一人で出掛けたの？」

私は、伸君の言つてる事が理解できなかつた。

「話しがあるつて、外に連れ出された。それで、付き合つてほしいつて言われたんだ」

「そ、そなんだ…」

一生懸命、冷静でいたけど、すゞく胸が痛かつた。

「でも、すぐに断つた」

「断つた？」

「うん、俺、最初に蓮斗の部屋で来ちゃんに会つた時から、来ちゃんの事が気になって仕方がなかつたから」

「な、何言つてるの！ 伸君」

「本当だよ、最初は蓮斗の彼女だと思つたから、手をだしちゃいけないって思つたけど、蓮斗は、直ちゃんと付き合い出したし、来ちゃんを俺の彼女したいって思つんだけど、ダメかな」

私は予想外の伸君の言葉に、びっくりしたけど、嬉しくて、涙が止まらなかつた。

「私、泣いてる。」

「嬉し涙なんて私にも出るんだ…」

「こんな感情あつたんだ…

「来ちゃん?」

「「「めん、あんまりびっくりして… そんな事考えてもなかつたから」

「直ちゃんから、音葉を彼女と勘違いして、来ちゃんが落ち込んで
いるつて、聞いた時は、びっくりしたけど、嬉しかつたよ」

「勘違いだつたんだね」

「うん、それに初めて来ちゃんに会つた日、帰るつて言つた来ちゃんを、泊まつていけば?」

つて言つたのも、もう少し一緒にいたかつからだよ」

「そうなの!全然気付かなかつた… でも、伸君するいよ!私は今日、
伸君にきちんと気持ちを伝える為にここに来たのに、先に言つんだ
もん」

「そつかあ、来ちゃんに先に言つてもうえば良かつたかな… 聞きた
かつたかも」

「ひつて、私と伸君は付き合い始めた。

「うじうじと悩んでいた自分が嘘のように気持ちがすつきりした。

由那も、直も、蓮斗も本当に喜んでくれた。
眞に心配かけたけど、結果が良ければすべて良。だよね…

伸君も私を好きでってくれた。私は、凄
い事だと思つんだ。

自分の好きな人が自分を好きになつてくれるつて、奇跡に近い事だ
と思つから。

この奇跡をいつまでも、ずっと大事に大切にしなきゃいけない。
大事な人がそばにいてくれる事が、当たり前だと思つてはいけない
んだよね。

伸君に出会えた事、伸君が彼氏になつてくれた事、これつて私にと

つて奇跡なんだから。

絶対に忘れちゃいけなかつたんだ。

相手を大事に思う気持ちを、相手を信じる気持ちを忘れちゃいけなかつたんだ…

「来？」

「あ、伸、『じめん、なんだっけ』

「何？もしかして、俺の話し全然聞いてない？」

「『じめん』

「『じめん』って顔してないだろ…」『やけている』「そ、なんだ、私、あまりに嬉しくて、浮かれすぎて、伸が隣にいる事が心地よくて、なんかボーッと余韻に浸つてしまつんだよね。

それを伸に話したら…

優しくKissしてくれた。

Kissなんて、初めてじゃなかつたんだけど。

でも、全然違つた。

嬉しくて、ドキドキして、緊張して…

伸との初Kissの後、初めて私を

「来」と呼んでくれた。私もそれから、伸と呼ぶよつになつたんだけど、

すごい照れちやつてなかなか言えなかつたんだよね。

でもね、伸にKissをしてもらつた時思つたんだけど…付き合つ

つて、言葉で交わした約束のよつたものから、体で付き合つて事を実感した感じだつたな。

つて、なんかHな感じに思つちゃうかもしないけど、Kissだけでこんなふうに感じる自分が素直に嬉しかつた。

伸とはまだつき合い出したばかりだけど、あんなに嫌いだつた自分を、少しだけ好きになれる感じがするんだ。

まだ、少しだけなんだけどね。

伸といふと、不思議と素直になれる。

毎日会いたくて、頭の中はいつも伸でいっぱいなんだ。

伸に出会つて、よつやく私は普通の女の子に少しだけ近づいたかもしれない。

伸とは、二日に一度、必ず電話をする事と週末には必ず会つ事を約束した。

最初はその位がちょうどいい!つて思つていたんだけど…付き合ひ出して、一ヶ月が過ぎた頃から、

二日に一度の電話では物足りなくなつていた。

そして、週末だけ会つのにも我慢できなくなつていて。

なんなの私。

前に付き合つてた人からくる毎日の電話はうざかつたのに…束縛されるのも、大嫌いだつたはずなのに…

びつじょつ…

伸に毎日電話したい！

伸が私に会わない日に何をしているのか知りたい！

人を好きになるつて…こういう事？

こんなんぢや、私が振つて来たの男達と同じぢやん！
うわ〜、

まさか自分がこうなるとは考へてもみなかつた。それほど、伸君を好きになつてしまつたんだ。

改めて実感…

そして、待ちに待つた週末！がやつて來た。

もう、一週間長すぎ！！

やつと週末。週末を指折り数えている自分が情けない…

「来、お待たせ…」

「伸、おつそいい…」

私は、待ち合わせに10分遅刻した伸に頬を膨らませた。

「ごめんな、よし、今日は海にドライブに行くぞお」

「海？行きたい！！」

「おお、来は単純だな、もう笑顔になつてゐる」

「だつて海に行きたいんだもん」

私は、小学生の子供のようにはしゃいだ。

もしかして、私が本当の小学生だつた頃より、今の方がずっと子供らしいかも：

あの頃よりずっと感情がある。

私達は、伸君の車で海に向かつた。

車を運転する伸の横顔もかつこよくて、見とれてしまつ。

伸はきつと、すぐくもてるんだろうな…

なんで、彼女いなかつたんだろ…

今まで、どんな人と付き合つてきたんだ…

伸を好きになればなるほど、いろんな事が知りたくなつてしまつ。

過去の事なんて、関係ないはずなのに…

過去の事なんて、関係ないはずなのに…

頭では分かっていても、私の心は切なかつた…

「来?..どうした?」

「どうもしないよ、ちょっと、伸の横顔に見とれてただけ
こんな事を平氣で言えてしまう自分が信じられない…」

「俺も来の顔、ゆっくり見たいな、一週間ぶりだから」

伸も今日会つてを楽しみにしてくれてたんだなあつて実感できた。

幸せだ…私。

「着いたよ」

伸は海に着くとすぐに車を降りて、助手席のドアを開けてくれた
「ありがとう…自分で開けるのに」

「「めん、違うんだ…もう我慢できない」

そつ言つて伸は、私の腕を自分の方に引つ張り、私を抱きしめた。
「伸…びっくりするつてば」

「「めん、来に会いたくて、抱きしめたくて仕方がなかつたんだ、
来の事をどんどん好きになつちやつて、自分気持ち押さえらんなく
なつてんだ」

「伸、嬉しい。私も会いたかったから」

伸は私を力いつぱい抱きしめて、熱く激しいKissをしてくれた。
私は、伸の気持ちがすごく嬉しくて自然に涙が溢れた。

「来、「めん、嫌だつた?」

「違うの、嬉しい。伸が私をこんなに好きでいてくれる事が嬉しく
て」

「来…愛してる。俺、週末だけに会つのは我慢できないんだ…会え
る日は毎日でも会いたい」

「私も伸に会いたくて、今日まで待つのが辛かつた」

「来…」

伸はさつさより激しくKissをした。

そして、伸の息が急に荒くなると…

「来、俺、欲情した自分を押さえられない。来が欲しい。いい？」

「うん、伸とならない」

私は、Kissだけで体が反応してしまっていた。
Hも初めてぢやなかつたけど、自分がこんなに相手を求めるのは初めてだつた。

伸は、私を車に連れて行き、Kissの続きをしてくれた。
そして、私と伸は一つになつた。

私は今まで以上に伸を愛おしく思えた。

大好きだよ…伸。

「来、俺ちょっと強引すぎたな…ごめんな…初めての場所が車なんて嫌だつたろ、今更反省」

「ううん、大丈夫だよ、場所なんて気にしないから」

「来は、いつも、俺の全てを受け止めてくれるんだな…大人だよ俺なんかよりずっと」

「そんな事ないつて。伸は思つた事をきちんと口に出して言えるから、そつちの方が、すごいと思うよ」

「今日、来を抱きたいつて言つたこと?俺、結構勇気振り絞つたんだけど…」

「え…、そんな感じには見えなかつたな」

「断られたらどうしようつて、まじ考えてたんだつて」

「そうだつたんだ…でも、それだけぢやなくて、私も毎日伸に会いたくて、気が狂いそつたのに、口に出して言えなかつたから」

「…」

「伸…?」

「来、俺達は付き合つてゐんだから、会いたい時は会いたいって言つて欲しいな…俺、自分が異常なほど、来を愛してゐんだと思つてたからさ」

「私も伸を愛し過ぎてるみたいで怖い」

「来つてすごく冷静で、大人つて感じがするから、毎日会つたり、電話したりするのって嫌なのかな?って…」

「確かに今まで付き合つた人からは、毎日の電話も毎日会つのも縛られてる感じがして嫌だつた」

「そつか、来の元彼も俺と同じで、来をすごく好きだつたんだろ」「私が本気で人を好きになる事ができなかつたんだと思う…でも、伸に会つてから、人を好きになるつて事が分かつたみたい…」

「ありがとう、俺、来の事を大事にすつからな」

決めた。

もう、止めよ!…

過去ばかり振り返つて、生きる事に無気力な私。

人を憎むばかりで、愛せない私。

こんなつまんない自分とはもうさよならしよう!…

これからは、伸と一人で、未来だけを見て行くんだ!
伸の過去も知らなくていい。

今、この幸せだけを大切にするんだ。

私は、新しい自分を見つけられた気がした。私一人じゃなく、伸と二人で未来に向かつて歩いて行こう!

私はそう決めた。

それからの私は楽に生きている気がした。

親への憎しみも不思議と和らいでいた。

伸とも会える日は毎日でも会っているし、毎日電話もした。
何気ない毎日がとっても幸せだと感じていた。

ただ、一つだけ気になつていている事があるんだ。

伸と付き合い初めてから、一度も蓮斗の家に顔を出してない事。
そして、週末には必ず来ていた蓮斗からの電話も全然こなくなつて
いた。

あんなに、遊びに行つていたのに、彼氏ができれば、顔も出さなく
なつちゃうのが辛かつた。

伸に会わせてくれたのも蓮斗なのに…

私は、気がついたら蓮斗の家に向かつていて。
平日の夜に蓮斗の家に行くのは初めてだつたから、蓮斗が家に居る
のかも分からなかつたけど、私は蓮斗に電話もしないで家に向かつ
た。

蓮斗の車ないな…

まだ。仕事が終わらないなかな。

私は、いないと分かつていながらも、蓮斗の部屋に向かつた。

「来ちゃん?」

「あれ?」

蓮斗はいなかつたけど、見覚えのある人が、蓮斗の部屋で蓮斗の帰りを待っていた。

「大輔だけど…忘れた？一回顔合わせてるんだけどね」

「あ、あ、思い出した、蓮斗の部屋に人がいっぱい集まつた日に、自己紹介してくれた、大輔君だよね」

正直、あの日は伸と音葉ちゃんを疑つてしまつた日でもあつたから、はつきりとは覚えていなかつたんだけど…

「そう、大輔。蓮斗は残業みたい」

「そつかんじや、また来る」

「なんか、蓮斗に伝えておくことあれば伝えるけど」

「ううん、直接話しがしたかつたから、また来るね」

「来ちゃん、ちょっとだけ時間ある？」

「え？」

「ちょっと、話しておきたいことあつて」

「何？時間はあるよ」

「今更、余計な話しなのかも知れないけど、陸矢の友達として黙つてらんなくて」

「陸矢の事なの？」

私は大輔君が何を言いたいのか、全然分からず、どまどつていた。

けど…大輔君は、とんでもない話しを私にした…

陸矢が私と初めて会つた日から、ずっと私を好き だつたつて事。

伸君と音葉ちゃんの事を誤解して、一人でパニックになつていたあの日、陸矢は自分の気持ちを私に伝えるつもりでいた事。自分の事で精一杯だった私は、陸矢のそんな気持ちに気付きもしなかつた。それと…

陸矢は正直かつこいい。

その陸矢が、今まで誰とも付き合つた事がないんだって。男女問わず、いろんな年代の人には好かれる陸矢だけど、自分から誰かを好きになる事はなかった。

その陸矢が私を好きになった。そんな陸矢を見ていて、大輔君はすごく嬉しかったんだって。

小学校から陸矢と一緒にいる大輔君は、陸矢の初恋を一生懸命応援した。

その結果、告白もしないまま、終わつた。

しばらくして、私と伸が付き合つてて噂を聞いて、陸矢は大輔君に…

「来が幸せなら、俺は大丈夫…来が泣くのが一番辛いから」と、最後まで私の事を一番に考えてくれていた。

大輔君は目に涙を浮かべながら、震える声で…

「来ちゃんが、陸矢より伸を好きになったのは、それは仕方がない事だと思う。けど、来ちゃんと伸が付き合う事で、陸矢や音葉がとても切ない思いをしていた事だけ、覚えていてもらいたい」「…分かった」

「すごい嫌ないい方しちゃつたけど、来ちゃんには幸せな恋をしてもらいたいんだ、陸矢の為にもそれが一番だから」

「うん、ありがとう大輔君」

やつぱり私は最低だ…

自分が、舞い上がつていたんだ。

陸矢がそんな思いをしているなんて、考えもしなかった。

自分の幸せにさ満たされて、周りにいる人の気持ちなんてさっぱり知らなかつた。

私は、人の行動や話し方で、誰がどの人に好意を持っているつてすぐには分かる位の鋭い勘を持つていた……はずなのに、伸が私を好きになつてくれていた事にも気がつかなかつた。自分の事になると全然ダメだ！

「ごめん。陸矢。

でも、陸矢の気持ちを知つた今でも、伸に対する私の気持ちは全然わらな い。だったら、伸ととことん幸せになる事が私にできる事だよね。

「陸矢、いっぱい傷つけてごめんね。

私は、伸をこんなにも愛してしまいました。

陸矢の気持ちには答えられなかつたけど、こんな私を好きになつてくれてありがと…

心の中で、陸矢に今の気持ちを伝えた。

蓮斗には会えなかつたけど、今日は、大輔君と話しができて良かつた。

だこど、もう蓮斗の家に行くのはやめよ…

私は、急に伸の声が聞きたくなつて、電話をかけた。

「来？」

「伸、会いたい…」

「どうした？」

「今、蓮斗の家に行つてきて、大輔君と話してきたんだけど、私、

自分の鈍感さに腹が立つちゃつた」

「陸矢の事…？」

「え、伸知つてたの？」

「来、今から飲みに行こうよ」

「飲みに？うん、別にいいけど…」

「んじゃ、すぐに迎えに行くから、待つてて」

伸、陸矢の事知つてたんだ…

伸はいつから知つてたんだろう。

十分後、伸は迎えに来てくれた。
最近、知つたんだけど、伸と私の家つて、来るまで七分の距離なんだ。

伸の家には行つた事ないけど、車で七分の距離に伸が住んでいると
思うだけで嬉しくなる。

私つて、単純。

伸は私を居酒屋に連れて行つてくれた。

「ここ、何度も由那と一人で来た事がある。

由那は週末には必ずデートだから、いつも平日ここに来てたんだ
けど、平日でもすごい混んでるんだよね。」「来？」

「え、なんでいるの？」

そこには、なんと由那が立つていた。

「職場の送別会なんだけど…、来、伸君紹介してよ」

由那は私の隣に居る伸の顔を見て、ニコニコしている。

「伸、私の親友の由那」

「初めてまして、池上伸です」

「噂には聞いていたけど、伸君つてかつこいい」

「それは、ありがとう」

「あ、でも、私の彼氏の次かな…」

「それでも光栄だな」

由那と伸はあつといふ間に打ち解けていた。

「あ、ごめん、来、邪魔者は消えるから、『じゅつくり』

「邪魔者なんかじやないつて」

「そう？でも、私も席戻らなきやいけないから」

そう言い残すと由那は席の方へ歩いて行つた。

そして、私と伸は初めての居酒屋デートを楽しんだ。

陸矢の事に、伸は一切触れなかつた。

でも、伸は私の落ち込んでいる気持ちを考えて、今日は居酒屋に連れて来てくれたんだなつて…

伸の優しさが嬉しかつた。

伸：

今日はいつも以上に優しい。

会話の一つ一つにさえ優しさを感じる。

陸矢の事には一切触れないけど、きちんと考えて私に接してくれてる。

そして…私は、自分がどんなにすごい人を彼氏にしたのか思い知らされた…

だつて…

色んな人が伸に話しかけてくるんだもん。

男の人だけじゃなく、綺麗な女人の人や、すぐ年上に見える女人の人まで。

でも、伸は、女人に話しかけられても、とっても無愛想な態度だ

つた。

女の人の話し方や話し振りを見ると、多分、親しい仲なんだと思う。それを、なんで伸はあれほどまで無愛想な態度を取るんだろう…

とにかく伸は、皆の人気者なんだ。

男女問わず、皆に親しまれている、すごい人なんだ。

私はすぐにそう察した。

私は、周りの人との間に境界線を引いて生きてきた。でも、伸は私のそんな生き方の逆だ。

誰とでも、仲良くなれるし、誰にでも優しくできる。そんな何かを持っている人なんだ。私は、素直に伸を尊敬した。

居酒屋に来てから、一時間後、まだ、店にいた由那に声をかけた後に私達は店を出た。

「伸はすごいね」

「何が？」

「友達が沢山いて羨ましい」

「皆が皆友達じゃないから、知り合い程度の人もいたし」

「うん、でも、それでもすごいと思って」

私は、自分に比べて、伸の友達の多さに本当にびっくりしたから、それを伝えたかっただけだったんだけど…

伸はしばらく黙ってしまった。

ふと、伸を見ると、さつきまでの優しい目をしていた伸はどこかにいってしまった。

「来だつて、蓮斗や陸矢とあんなに仲がいいだろ。異性なのに、彼氏でもない奴とあんなに仲良くできる方がすごいと思うけど」

「蓮斗とは前からの知り合いだから」

「んじや、陸矢は？」

「え？ 何でそんな事聞くの？」

「来はただの友達としか思つてなくとも、陸矢はそうは思つてない事に気付かなかつた？」

「なんで…なんで伸が怒るの？」

初めて見る伸の怖い顔に私はどうしていいか分からなかつた。

「俺から見ると、来の態度は蓮斗にも陸矢にも氣があるように見えた」

「伸：どういう意味？」

「来の態度や行動が陸矢に期待を持たせたんじやないか」

悔しかつた。

伸に私がそんな風に見られていた事がすぐ頭に来た。

蓮斗や陸矢といふと、楽しかつた。素直に笑える場所だつた。

誰とでも上手に付き合える伸には分からんんだろうな…

「正直、楽しかつたよ。蓮斗や陸矢、それに真、あの人達といふと嫌な事も全部忘れられたし、一緒にいるのがすぐ楽だつた」

「俺より先に陸矢が、来に告つてたら、来はどうした？」

伸：何言つてんの？

伸と付き合つてゐる事に陸矢は全然関係ないのに。

「伸、いい加減にして」

「来、ちゃんと答えてくれよ」

「私は、伸が好き。伸を初めて見た日から、伸の事しか頭にないから！ 伸に会うまで、自分が嫌いで仕方がなかつた。家庭環境も最悪だつたから、親の愛情も知らない私が、本気で誰かを愛せるなんて思つていなかつたのに、伸を好きになつた。それだけでダメなの？ 私は伸が好き。だから、これ以上そんな事言わないで」

私はそれだけを伝えたると、その場を後にした。

涙が止まらなかつた。

伸が陸矢の事で、あんな事を言つなんて…
考へてもみなかつた。

「来…、来、待つて」

「今日はもう帰るから、伸ももう帰つて」

「送るよ」

「一人で帰るから。今は一人の方がいい。一人にして…」
「来ごめん、俺、陸矢の気持ちはずっと知つてたんだ。すごく来を思つてた事に気付いていた。俺と来が付き合い出した時、陸矢から俺は、来を絶対に泣かせないでくれつて言われた。泣かせたら、来は俺がもらつて」

「……もう泣いてるよ」

「ごめん、俺、いつか陸矢から、来を取られるんじゃないかつてす

「ごい不安だつた」

「なんでそんな事考えるの？」

「陸矢、かつこいいし、性格いいし、誰からも好かれるから、俺に勝ち目ないんじやないかつて」

「私は陸矢より、伸の方がかつこいい、性格も好き。伸だつて、誰からも好かれてるじやん、全部勝つてるよ」

「来、ごめん、来の事をすゞく好きなのに、嫌な事言つてごめん、来。ごめんな、来、愛してる」

そつ言つて、私を思いきり抱きしめてくれた。

「伸…、いっぱい知り合いの女人達が話しかけてくれたのになんな

に無愛想だつたの？」

「来は、俺が女に声かけられるの見て嫌じやなかつた？」

「ただ、伸はすごいなつて感心してた…」

「ハハハ…来はそういう所、ズレてるよなあ、普通自分の彼氏が色々な女から声かけられてたら嫌だる」

「え？」

「来が嫌な思いするのが嫌で、あんな無愛想な態度取つたんだけど「ええ、私の事なら気にしないでいいから、友達以上じゃないなら遠慮しないで」

「来はヤキモチ焼かないんだな」

「そんなことないよ」

「そんな事ないよ、伸。

伸に彼女がいると思った時、ヤキモチを通り越して頭がおかしくなりそうだつたよ。

でも、今の伸は私の彼氏なんだもん、伸を信じる事も大切。

伸の友達まで制限しちゃいけない気がした。

この日の喧嘩から三ヶ月間、私達はささいな言い合ひはあるけど、大きな喧嘩もしないで、幸せな毎日を送つていた。

伸の中学時代からの友達何人かにも会わせてもらつた。
一緒に飲んだり、カラオケ行つたり…
伸の家にも何度も遊びに行つた。

そして、私の21歳の誕生日もお祝いしてくれた。

特別なプレゼントはなかつたけれど、とても楽しい夜をプレゼントしてくれた。ここ最近で、色んな伸を発見した。それに、私も少しは伸の彼女らしくなつた気がする。

実は伸は一人暮らしだつた。つて言つても、アパートにじやなくて…

伸も私と同じ、複雑な家庭環境だつた。

父親は都会で、単身赴任。母親はずつと前から家出中。

お姉さんもいるけど、今は彼氏と彼氏のアパートで同棲中。

そのせいなのか、家庭料理に飢えていた。

私は、伸の為に毎日夜ご飯を作つて伸の帰りを待つ生活を送つていた。

私もずっと一人でご飯を食べていたから。

両親の離婚で、父親に引き取られた私と妹。妹は高校を卒業すると同時に家を出た。

私はいつも一人で食べていたから、毎晩伸と食べるご飯は楽しかつた。

いつも通り、伸と一人で楽しい食事をしていいたその時、伸が真剣な顔で私に話しがあると言つて箸を置いた。

「え？ 嘘でしょ 伸」

「ごめん、来、来週出発する」

「なんで急に…」

「ごめん、でも、急じゃないんだ。いつでも行ける準備はしておけつて、ずっと親方に言われていたから」

突然、伸が来週から、遠くの現場に行く事になつたと言つてきた。遠くと言つても、家から通える距離だと思つたんだけど…

全然違つた。

ここから高速を使つても7時間はかかる現場。

それに、完成まで最低でも半年はかかるらしい。

私は突然の伸の言葉に頭が真っ白になつた。

これつて遠距離恋愛になるつて事だよね。

そんな事、考えてもみなかつた。

「来？離れても俺の気持ちは変わらないからな

「嫌だよ。伸と離れるなんてできないよ」

「嫌だよ。伸と離れるなんてできないよ」

「来、ごめんな。でも、早ければ半年で帰つてこれるから、待つて欲しいんだ」

「半年なんて長すぎる。私に遠距離恋愛なんて無理だよ」

「無理だって言われても仕事なんだから、分かってくれよ」

「ごめん、伸、少し考えさせて」

私は伸の部屋を飛び出した。

考えるつて何を考えるんだ…

伸と別れる事？それとも仕事と私どっちが大事なの？なんて、そんな馬鹿な事言つつもり？

考えたつて、答えは同じだよ。

私は、伸とは別れられない。もつ、好きとか嫌いとか、そんな言葉で片付けられないほど、私にとつて伸はかけがえのない人になつてしまつているんだから。結局、考へても考へなくとも答えは同じなんだ。

伸とは別れたくない。このまま、伸が行つてまつたら私達は終わつてしまつ。

伸が待つて欲しいつて言つんなら、待つしかないんだ。

伸を信じて待つしかないんだよ…

夜、伸から電話が来た。

「来、今日はごめんな。でも、遠距離になるなら別れるとか馬鹿な事考えないでくれよ」

「少し考えた…」

「来、本気で言つてるのか」

「でも、無理だった。私は伸と別れたくない。だから、待つてる」

「来、ありがとな」

「浮氣したら許さないからね」

「しないつて。現場、山の上だし…それに、来以外の人は興味ない」

「その言葉、信じて待つてる」

それから、出発の日まで毎日会つた。
いっぱい伸と愛を確かめあつた。

そして、伸は出発した。

伸は私と離れてしまう事に不安はあっても、見知らぬ土地で、大きな仕事をやれる事がすごく楽しみなんだと思う。

私の前でそんな事は口に出さなかつたけど、顔を見てれば分かつた。
なんで私と離れてしまうのに、伸は少しも寂しそうな顔をしないんだろうと最初は考えた。

でも、すぐに思った。

伸は、大工という仕事が大好きなんだ。初めて向かう大きな現場を目の前にして楽しみで仕方がないんだ。

離れてしまうのはとても寂しかつたけど、仕事に一生懸命な伸を誇らしく思った。

でも、誇らしく思う一方で、私には伸の他に何もない事を思い知らされた感じがした。

伸と離れてしまつた今、私には何が残る?

伸が帰つて来るまで、指を数えて待つてゐしかねないの?

あ～ダメだ！これじゃ、少し前の嫌な自分に戻つてしまいそう。
何か見つけなきゃ。伸が帰つてくるまで、打ち込める何かを探した

い。

中身が空っぽの、伸に会つ前の自分には戻りたくない。戻っちゃいけないんだ。

でも、何か見つかるって言つても、今まで、夢も目標もやりたい事も、何もなかつた私が、突然探したところで見つかるはずがないんだ

結局、何も前に進めないまま一週間が過ぎてしまった。

伸と離れて一週間。伸からの連絡は一度もない。

伸と付き合つてから、一週間も音沙汰がないのは初めてだった。

私から電話をしても、伸は電話に出てくれない。

着信があれば、いつもは必ず電話をくれたのに…

私は不安で不安で何も手に付かなかつた。

まだ、一週間しかたつてないのに、こんなんでこの先どうなるんだろ。

電話もメールもこないまま十日が過ぎた。

この頃から、私に少し変化があつた。

毎日毎日、伸の電話を待つ生活がいい加減嫌になつていた。

バイトを始めよ。

私は、伸を待つだけの毎日にピリオドを打つた。

バイトをしてお金を貯めようと決めた。将来の為に…なんて言つたら大げさだけど、伸との未来を夢見て、時間がある今、少しでもお金を貯めようと決めた。

だけど…

バイトを探すのは案外難しかつたりする。

会社に見つからない、短時間のバイトって何があるんだろう?バイトをすると決めたものの、何をしていいか分からない。

私は、会社の一つ下の美果ちゃんが会社に内緒でバイトをしている

のを思い出して、美果ちゃんに電話をしてみた。

コンパニオン… かあ。

私にできるかな。

美果ちゃんは、半年前からコンパニオンのバイトをしてるんだって。時給も高いし、週末だけのバイトでもいいみだつた。それから、派遣される場所はほとんどが旅館や温泉街。今まで会社の人には会つた事はないつて。

伸が帰つてくるまで、やつてみようか…

でも、伸が反対するのは目に見える。

「なんで、そんなバイトすんの？」

伸は絶対にそう言つと思う。

喧嘩の種を作るだけかな…

伸に反対されるのを分かつていながら、それでもコンパニオンをするべきなのか正直迷つた。

でも、私はお酒は強い方だし、自分がしっかりしていれば大丈夫だといつ自信もあつた。

伸が帰つてくるまで！

やつてみよう…

私は、伸に報告するために電話を鳴らした。

けど、やつぱり伸は出なかつた。

次の日、私は美果ちゃんにバイト先の事務所まで連れてついてもらつて面接をした。

心の中で、伸に怒られるだらうなあと思いながらも、やるからにはきちんとやらなきゃいけないと腹は決まつていた。

そして…

なんと、なんと… 今日からやつてもらえないと言われてしまった。

美果ちゃんが私の指導係で同じ宴会に出てくれるところだけ…

そんないきなり出来るのあつて感じなんだけど。

私は、何がなんだかよく分からないまま、着替えをさせられて、宴會場に向かつていた。

美果ちゃんはもう、昼間の美果ちゃんは何処にいったのあつて感じ。
超、テンション上がつてる…

そして、いよいよ、初バイトが始まった。

疲れた…

体が疲れたってんじやなくつて、なんか気付かれした感じ。
私の初バイトの一時間はあつという間に終わつてしまつた。

でも、意外…

結構楽しかつたかも。

人付き合いが苦手な私なのに…

オヤジ達の酒飲みの相手ができるなんて自分でもビックリする。
意外と普通にバイトをこなせていた。

そして、ふと携帯を見ると、着信あり、

伸?まさかね…

ずっとかかつてこなかつたのに、今日に限つて電話がくるなんて事
ないつて。

私は、自分の目を疑つてしまつた。

伸…。

本当に伸からの電話だ。

私の事なんて、忘れているんだと思つてたのに。私はすぐにかけ直

す事ができずに戸惑っていた。

バイトをしているもそただけど、伸が今まで電話をくれなかつた理由を聞くのが怖かつた。

私はしばらく携帯電話と睨めっこをしていた。

頭の中で色々な事を考えてしまつ。

伸の声が聞きたいのに…

やつと、伸と話しができるのに…

怖い…

でも、このままじゃいけない。

私は思い切つて、伸にかけ直した。

「来？」

「伸…久しぶり」

「ごめん、ずっと電話しなくて…」

「今日はどうしたの？私から何度もかけても出てくれないのに…」

「来…ごめん、今日はこつちに来て初めての休みなんだ、ゆっくり

時間できたから来の声聞きたくて

「へえ…私は毎日伸の声聞きたいのに。私は伸と話しがしたくて、頭がおかしくなりそうだったのに」

「ごめん」

「でも、もういいよ」

「もう、いいつてどうこう意味だよ」

「伸が帰つてくるまで、バイトに打ち込むから。

毎日、伸の事ばかり考えて何も手につかない自分が嫌だから

「何のバイト？」

「コンパニオン」

「……」

「怒るよね？でも、伸に相談しようと思つて電話したけど、伸はい

つも出てくれなかつた

「何でコンパニオンなんだよ。バイトなら他にもあるだろ」

「もつ、決めたの」

「俺は嫌だよ。自分の彼女がコンパニオンなんて普通嫌だろ。考えれば分かりそうだけど」

「じめん、今日はもう切る」

久しぶりの電話なのに、喧嘩しちやつた…

なんで今まで、電話をくれなかつたのか、聞けなかつた。

こんなんで、私達やつていけるのかな？

どんどん不安になつていく。

次の日もその次の日も、毎日伸から電話がきた。

伸は毎日、バイトを辞めろと言つ。

どうして、今になつて毎日電話をかけてくるのかと聞いてみると…

なんか、がつかりした。

毎日、7時まで仕事をして、それから、決まってお酒飲みになるらしい。

途中で、自分が彼女に電話をかける為に抜ける事ができなかつた…

そんな事が理由??

私が、毎日伸からの電話を待つていた時、伸は楽しくお酒を飲んでたんだね。

私の事なんて気にかけてなかつたんだと愚つと、すごく腹がたつた。

それからも、毎日電話は來た。

でも、喧嘩ばかりの電話に私はもううきぞりだつた。

だけど…

自分でも信じられないんだけど…

それでも、伸以外の人に目は行かなかった。

バイト先の友達に誘われて、男の人と飲みに行つても、必ず伸と比べてしまつ。

喧嘩しても、離れていても、私は伸以外の男の人には一切興味がない事だった。

なんとなく、気まずいまま一ヶ月も過ぎてしまつていた。

遠距離恋愛つて、想像以上に難しい。

一緒にいれば、喧嘩なんてめつたにしないのに、離れているとそれをいな事ですぐに喧嘩になる。

不安になつて、余計につづかかる。

謝るタイミングが分からなくて、なんとなく気まずいまま、時が過ぎてしまつ。

私達の遠距離恋愛は、こんななの繰り返し…

あ～あ、いつまで続くんだ、こんな生活。

伸が帰つてくるまで、私達、続くんだろうか。
ふと、そんな事を考えてしまつ。

伸は短くても半年はかかる現場だと言つていたけど、それ以上に長引く可能性もあるつて事……

考えるとどんどん不安になつて、悪い方、悪い方へと考えてしまつ。

今まで、週末だけだつたバイトを平日にも入れてもうつた。
毎日、伸の事を考えて落ち込んでいても仕方がない。

私は、バイトに打ち込んだ。

伸の事を考える時間なんかないくらいに、働こうと思つんだ。
バイトの入つていらない日は、由那や直の家に遊びに行つたり、飲み
に行つて、自分なりに忙しい生活を送つた。

「来さん、今日、飲みに行きませんか？」

「え？ 飲みについて今から行くの？」

「まだ、22時ですよ！ 行きましょうよ！ 明日、休みなんですし」

「まあ、いいか…」

バイトが終わつて、事務所に戻ると、美果ちゃんが私を待つていた。
美果ちゃんとは、初めて飲みに行くから、ちょっとドキドキだつた
りするんだけどねえ…

私達は、事務所の近くの居酒屋で飲む事にした。

「お疲れ様でえ～すう！ 乾杯！」

「お疲れ様」

「来さん、テンション低すぎ。楽しく飲みましょうよ」

こんな楽しそうにはしゃいでいる美果ちゃんを見ると、会社での、
あの真面目な働きぶりが嘘みたいに感じてしまうんだよね。

美果ちゃんは、色んな人と色んな付き合い方が出来る器用な人。
相手の性格に、きちんと合わせられるんだ。

私は大違い。

でも、美果ちゃんは彼氏を作らない。理由は聞いた事ないんだけど…
私の知つている限り、会社に入社してから、つまり、社会人にな
つてからは誰とも付き合つてない。

美果ちゃんは、高校卒業後にすぐうちの会社に入社したから、一年
間は誰とも付き合つていらない事になる。

それに、男友達はたくさんいるみたいだけど、自分からは一切電話はかけないんだよね…

まあ、自分から電話をかけなくとも、いっぱい電話がかかってくるみたいだけど…

美果ちゃんは可愛いのに彼氏を作らないから、皆が狙ってるんだと思つ。

「来さん、来さん! 何私の顔に見とれてるんですか! 飲みますよ」

「あ、ごめん… 美果ちゃん可愛いなって、見とれてた」

「そんな事言つても、おじりませんよ」

「分かつてるつて! よ～し、今日は飲むぞお」

私は、美果ちゃんと飲んでる時間がとても楽しかった。伸の事も忘れて、心の底から笑てる気がする。

いつも、頭のどきかに伸がいたから…

「来さん、なんかよつやく、ちやんと笑つてくれましたね」「え?」

「最近の来さんつて、すんじゃマスッとして、怖かったですよ…それに、老けて見えたし…」

「えつつ、老けて見えてたの」

「はい、来さんの眉間にシワつきました」

「嘘でしょ、美果ちゃん 嫌だよ」

「まあ、笑つてくれたから、少し若返つた気がします」

そう言つて、美果ちゃんは微笑んだ。

今日、私を飲みに誘つてくれたのは、美果ちゃんなりの優しさだつたんだな。元気のない私を見兼ねてさそつてくれたんだよね。

ありがと… 美果ちゃん。

「来？」

「蓮斗…！」

突然、蓮斗が私の目の前に現れた。

久々の蓮斗。

「何？ 女一人で寂しく飲んでるの？」

「失礼な奴！ 女一人で楽しく飲んでるんだけど」

「そつか、そりや失礼」

「蓮斗、一人？ なわけないか」

「今、直と陸矢と大輔が来る。俺、場所取り」

陸矢も来るんだ…

なんか、会いづらい…

「来さん、紹介して下さいよ」

「あ、ごめん、ごめん、こいつ蓮斗」

「初めまして、来の親友の蓮斗です… つていっても、来の奴、彼氏
ができたら全然相手してくれないんだけどさ」

「美果です。来さんと同じ会社で働いています」

あんなにいつも一緒にいた蓮斗。

伸と付き合い始めてからは、陸矢の事もあって、連絡も取らなくな
つていた。

それでも、今日の蓮斗はいつも蓮斗。

この、普通に今までと同じように接してくれる事が、すく嬉しか
つた。

「直！ こっち、こっち！ 来と会つちやつたよ」

直、陸矢、大輔君がびっくりした顔でこっちてくる。

「来、久しぶりだな、元気だつたか」
え、陸矢が普通に声をかけてくれた。

会いづらいとか、そんな事を考えてなんとなく、陸矢達を避けていた自分が頭に来た。

「陸矢、久しぶり！元気してたよ」

直と大輔君とも、少し話した後、美果ちゃんが

「一緒に飲みましょう」

と言つた事で、私達は思いがけず六人で飲む事になった。

飲んでる最中にも、私は美果ちゃんつてすごいなあとただ感心してた。

私以外、全員と初対面なのに、もう馴染んでる。

美果ちゃんつて、本当に可愛いから、男達が話しをしたがるのはよく分かるんだけど…

直とも仲良く話してる。

ずっと前からの友達のよう…

でも、美果ちゃんが場を盛り上げてくれたおかげで、本当に楽しい飲み会になつた感じ。

それから、私達は一時間騒いで、解散した。

そして、店を出ると私は陸矢に止められた。

「来、ちょっと話したいんだけどいい？」

「え、でも、美果ちゃんいるから…」

「何言つてるんですか、私は一人で帰りますから気にしないで下さいよ」

「「めん、美果ちゃん」

美果ちゃん、ごめんね。

美果ちゃん、ありがとうね。

陸矢と私は、二人で近くの公園に入った。

「来、大輔が変な事言つたらしぃな…」

「うん、びっくりした」

「びっくりさせてごめんな」

「ううん、私こそ全然気付かなくてごめん」

「何、謝つてんだよ、それより、美果ちゃんが、最近、来が元気な
いつて心配してたぞ」

「そんな事ないつて」

「なんで、バイトなんかしてるの？伸は知つてるのか？」

バイトの事、美果ちゃんから聞いたんだ…

あんまり知られたくないなかつたかも。

「伸には言つた…」

「来、もしかして、伸とうまくいつてない？」

伸とは、最近ぎくしゃくした状態で喧嘩ばかりしてるけど、陸矢には言えないよ。そんな事絶対に言えない。

「大丈夫だよ」

「来に遠距離恋愛なんてできるのか？」

「なんとかできるから安心して」

「来のそんな顔見て安心できるかよ」

「え？」

「ちゃんと寝てるのか？ちゃんと飯食ってるか」

「大丈夫だよ、陸矢」

そういうえば、最近、少し痩せたのかも…

それに、夜もあまり眠れてないんだよね。

なんで、そんな事にまで陸矢は気がつくんだろ…

「来…、伸じゃなきゃダメなのか…俺じゃ伸に勝てないのか」

「陸矢…」

「俺は来にこんな思いさせない、伸より来を愛してる自信もある…」

「俺じゃダメか?」

「陸矢、ありがとう。でも、伸とうまくいってないから、陸矢と…」

「なんてできない」

「俺はかまわないよ」

「陸矢、どうしてこんな私の事をそんなに思つてくれるの?」

「好きになるのに、理由なんてないだろ。俺は、始めて会つた日から

らずつと来が好きだから」

そう言つて私を抱きしめてくれた。

このまま、陸矢を受け入れたら、私は幸せにしてもらえるかも知れない。

でも、私が陸矢を幸せにはできないんだ。

離れていても、喧嘩をしても、どうしても伸が好きなんだから。

「陸矢、ごめん。どんなに離れていても、連絡がこなくても、私は伸が好き。伸の帰りを信じて待つしかないんだ」

「来も、相当、伸の事が好きなんだな!その気持ち、俺にはよく分かるから…ただ、いつでも俺は来の味方だからな」

「ありがとう、陸矢」

陸矢の優しさを無駄にしない為にも…自分の為にも…

このままじゃいけない!

私は伸に電話をかけよつと携帯電話を持った。

えつ、えつ、ヤバイ…！

着信あり…

しかも、十回近くあるよ…

全部、伸だ。

私、バイトの時から、マナーモードにしたままだよ。うわあ～、絶対怒られるつて…

でも、このまま、シカトする駄にもいかないし…

私は、恐る恐る伸に電話をしてみた。

「もしもし」

ヤバイ、絶対この声怒つてる。

「じめん…伸、電話マナー モードにして 気がつかなかつた」

「良かつた…こんな時間までつかならないから、なんかあつたと思つた」

あれ？もつと怒鳴りれるかと思つた…

「じめん…伸」

伸がこんなに心配してくれている中、私は腹でお酒を飲んでいました。とは絶対に言えない。

「来のバイトがバイトだから、遅い時間まで電話が繋がらないと不安で心配になる」

「じめん…気をつけろ」

「まあ、無事ならいいんだ。来、来週休み取れたから、週末だけだけ帰れるから」

「本当?」

「うん、早く来に会いたいよ」

「良かつた…」

「俺も良かつた…」

今までには、会話にまでなんとなく距離のあった二人。でも、今日は違つて感じた。

会える喜びからなのか、普通に話せる。

会える事も勿論嬉しいけど、普通に話しができた事がすゞぐく、すぐ嬉しかった。ずっと、喧嘩を繰り返してきたから。

伸に会える。

そう考へると、今まで、伸が連絡をくれなかつた事、バイトを辞めろといつも言っていた事。

そんなのは、もうどうでもいい事のよつとされた思えた。

その日から、私の頭は伸一色だつた。

三日間しか会えないけれど、今の私には、少しの時間でも伸といられる事が楽しみで仕方がなかつた

改めて思い知らされる伸への想い。

伸が帰つて来る三日間はバイトを全て断つたし、準備万端!
早く帰つて来てええ…伸

「来、ただいま」

「伸…帰つてくるのは明日じゃなかつた?」

「そう。でも、雨降つて現場に出れないから、一早就く休みもうれた」

「嘘…伸！嬉しい」

私は嬉しさを押さえられず、思いきり伸に飛び付いた。

なんの、予告もなしに、一早就く私の家に迎えに来てくれたけど、私は伸の家に持つていくお泊り道具の準備は完璧だつたりする。

「来、腹減った。なんか作つてよ」

「うん、伸の家に行つたら作るから、行こう」

「その前にいい？」

「うん…」

伸がKissを求めていたのはすぐ分かつた。

私は自分から伸にKissをした。

自分で驚くほど激しいKissを…

私は久しぶりに触れる伸の唇に幸せを感じた。

「来、続きを俺んちでしようっか」

「我慢できるかな…」

私は、ちょっとすねてみた。

伸の家に着くと、伸は…

「来、腹減った」

と私に抱き着いて來た。

「今、作るからちょっと待つてくれる?」

「ダメ、待てない」

そういうて、私にKissをした。

「伸…」

「先に、来を食べる」

伸の指が私の体に触れるたびに、私の体は反応します「ごー…

体も心もこんなに伸を求めてる。

伸の激しい息使いを聞きながら、私はすぐに頂点に達してしまった。

「来、嫌な思いいっぽーさせて「ごめんな

「私もごめんなさい」

「帰つて来るまでもう少しかかるけど、俺を信じて待つてくれ

「うん、ちゃんと待ってるから

四日間、トイレに行く時以外は、ずっと伸にくつこっていた。

でも、四日間なんてあつといつ間に過ぎてしまった…

寂しくて泣きそうになってしまつ。

「来、お願いがあるんだけど…」

「何？」

「いいから」「いいけど…」

「ごめんな、俺心配性だから

「分かった。伸が帰つて来たら辞めるから

「うん、もう少しだけ待つててな」

伸は行つてしまつた…

寂しい。

ずっと一人に慣れていたはずなのに、一人でいる事が、すごく楽だつたのに…

ダメだ。

寂しくて、苦しくて…

胸が痛い。

でも、離れていた事で距離ができてしまった二人の関係が、修復された気がする。

お互いの存在の大切さを改めて実感できた。

伸は、また行ってしまったけど、私達はもう大丈夫。
そんな自信も持てた。

それからの私達は、一度も喧嘩をしていない。

伸も、バイトを辞めて欲しいと言わなくなつた。

なんでだろう…

伸が帰つて来てくれた日以来、前に比べてお互いを信じ合える様になつた気がする。

それからの三ヶ月は、多少の寂しさはあつたけれど、不安になる事は全然なかつた。

でも、伸にばかり夢中になつて、幸せの絶頂にいた私を神様は許してくれなかつたみたい…

小さな会社を経営していた父親の会社が倒産…した。

なんで…

今まで、親に何かを買つて欲しいと言つた事もないし、高校生になつても、お小遣さえももらつた事がない。

うちの親にお金の余裕がないのはずっと前から知つてた。

だから、高校一年生の頃から、お小遣欲しさにバイトをした。

お金の面だけは、親を困らせなかつたはず…なのになんで…

今まで、親には振り回されっぱなし…

また、私は近所の噂の的になるんだ…

やつてらんない…

それからの毎日は、本当に最悪だつた。

毎日のように、父親を探している人達が家にくるし、電話も電気も水道も全部止められた。

肝心の父親は帰つてこない。今、何処にいるかも全然知らない。

娘を一人置いて、父親は何処かに隠れ…

私は、怒りで頭がおかしくなりそうだった。

悔しくて、涙が溢れてくる。

私は、親に愛されていないんだ…

改めて感じさせられた。

平氣で、離婚や再婚をする父親。

再婚して間もなく新しい母親は家を出た。

親に甘える事も知らずに今まで生きてきた。

それでも、最近は自分でも驚く位、普通の人並の感情も持てるようになつてきたのに…

神様は、また、私を見放すんだね…

こんな状態の中、父親が家に帰つてこない事が私には理解できなかつた。

それでも、心の奥底で、もしかしたら、寝る間も惜しんで金作に走り回つているのかも知れない…

ほんの少しだけそう信じたいと願う自分もいた。

でも、そんな私の願いは一瞬で打ち砕かれてしまつた。

「来…」

「由那どうした？」

夜中に由那から電話がかかつて來た。

「私、来のお父さん見つけたかも…」

「え！何処で見た？由那教えて！」

「…今、会社の人達と飲んでるんだけど…………。

来のお父さん、ここで飲んでる」

私は、その瞬間頭に思いきり血が上つてしまつていた。

由那に場所を聞くと、無我夢中で、その場に向かつた。

一瞬でも、寝る間も惜しんで、金作に走つていると思つた自分が馬鹿だつた。

私は飲み屋に着くと、父親を探しだし、思いきり殴り飛ばした。

でも、私の怒りは…こんなものでは納まらなかつた。

なんで…どうして、今の状況で酒なんか飲んでられるの？

「酒飲む金なんて、今のあんたにないだろ」

私は怒りで震えていた。

「酒でも飲まなきや、やつてらんねえんだよー。」

その父親の一言に私は爆発した。

私は、気がつくと、カウンターにあった包丁を右手に持っていた。

「来ー馬鹿なことしないでよー。」

遠くで、由那の震えた声がする。

「ごめん…由那。

その瞬間、店の店員に押さえられてしまった。

刺せなかつたんだ…。

我に返ると、両腕を警察の人に掴まれて、パトカーに載せられた。

警察に着いて、色々話を聞かると、自分がとんでもない事をしよつとしたんだ…

そう気付かされた。

未遂に終わったけど、店の人へ止めてくれなかつたら…

私は確実に、父親を刺していた。

未成年じゃないし、私はいつまで、こじにいなきやいけないんだう…
う…
伸が帰つて来るまで、出れるのかなあ…

由那、怒つてるだろうなあ…

直や蓮斗も、陸矢も皆心配するだらうなあ……

私は自分がここを出れないと覚悟していた。

でも、

以外に早く出してもらえて……

帰り際に警察の人には

「お前はいい友達いるんだな。毎日、お前を外で待ってる友達がいるぞ」

そう言われた。

由那だ。

私は、涙が溢れてビリする事もできなかつた。

由那……

こんなビリしようもない私を毎日毎日待つてくれたんだ。

由那の目の前で、あんな事したのに……

それでも、私を心配してくれるんだ。

由那、ごめんね。ありがとう。

私は、溢れてくる涙を必死にこらえて外に出た。

「来……」

「由那、ごめん」

その瞬間、由那の右手が私の頬に思いきり飛んできた。

痛いよ…痛いよ由那。

「来、何やつてんのー。」

「「めん…」

「来が、今まで両親にどれだけ嫌な思いをせられたかは知ってるけど、お父さんを刺してどうするつもりだったの？」

「……」

「来、やつと幸せをつかんだのに、自分からその幸せを壊すつもり？お父さんを刺したら、一生、それを背負つて行かなきゃいけないんだよ」

「……」

「来ーー田覚ましてよーーやつと、来の笑った顔が見れる様になつて、私はすゞしく嬉しかつたのに、あんなに憎んでいたお父さんの為に、幸せ壊さないで…来…お願ひ…」

由那はそれだけ言つと泣き崩れた。

由那…

私の為に泣いてくれる友達がいる。
間違つた事をしてしまつた時、本氣で叱つてくれる友達がいる。
私、親には恵まれなかつたけど、友達には恵まれてるよね。

「由那、「めんね…今はすゞしく反省してゐる。もつー一度とあんな馬鹿な事しないから」

「約束だよ。次あんな事したら、許さないよ」

「うん、分かつてる」

由那ありがと。

「送るから…」

由那は車で家に送つてくれた。

何これ…

私は自分の家に着くと硬直した。

酷い…

玄関のドアに

”人殺し” ”金返せ” そんな貼紙が数え切れないほど貼られていた。

”人殺し” つて私の事だよね？

”金返せ” これは父親に来た借金取りかな…

こんな事つて本当にあるんだ…

玄関にこんな貼紙するなんて、テレビの世界だと思ってたよ。

涙が止まらなかつた。

伸と出会つてから、良く泣いてるなあ私。

今までの私なら、こんな事で絶対に泣かなかつたのに…

「”めんね、由那。なんか涙が止まらない”

「当たり前だよ。こんな事するなんて…ひど過ぎる」

「なんか最近泣いてばっかり」

「それが普通なんだよ。悲しい時は思いきり泣けばいいし、笑いたい時は大口開けて笑えばいい。今までの来は、こんな簡単な事が出来なかつたんだよ」

「そつか…これでやつと普通の人になれたんだ」

「そう、そう」

由那はそのまま車を走らせた。

「何処行くの？」

「だつて、あれじや、家には戻れないでしょ。近所の噂に来が潰されちゃう…」

「でも…行くところないからいいよ。私、負けないから」

「しばらく私の家にいればいいよ」

「それはできない…」

「どうして?」

「由那にこれ以上迷惑かけられないし…私を泊めるって言えば由那の親は絶対反対するよ」

「大丈夫きちんと話しそれば分かつてくれる」

由那は、家に着くと私を一人車に残して、親に事情を話しに行つた。なんか私、由那に頼つてばかりだ…

「来、家入ろ!」

「えつ、いいの?」

「勿論、きちんと分かつてくれたから…」

「ありがとう、由那」

そして、私は普通の家族の温かい食卓を初めて経験した。由那の両親は、こんな私を快く迎えてくれた。

楽しかった：

こんなに楽しいんだね。

家族での食事つて。

私の家は、顔を合わせれば喧嘩ばかりだったから、こんなに楽しい食事は初めてだった。

その夜は久しぶりに、ゆっくり眠れた。

私は、今まで、一人で生きて来た気でいたけど、それは違う…困った時に、家族の力を借りる事はなかつたけれど、友達には頼つてばかり…

人は一人では生きられないんだね。

今日、それが分かった気がした。

それから、私は会社を退職した……

バイトも辞めた。

辞めさせられたんだけどね。

伸とも、ずっと話してない……

私が父親を刺そうとした日から、皆が私から離れていく様な気がする。

由那と由那の家族は別としても、一歩外に出ると皆が自分の噂をしているようにさえ感じる。

伸からは、毎晩着信があるけれど……

怖くて出れない……

逃げてるだけなんだけどね。

伸、どう思つてるかな？

未遂とは言え、父親を刺そうとした私と、今まで通り付き合ってくれる？

不安ばかりが過ぎつてしまつ。

でも、いつまでも逃げてる訳には行かないよね。
きちんと、伸と話をしなきゃいけない。

自分が犯した現実から、田を背けてばかりじゃいけないよね。

その夜、勇気を出して、伸に電話をかけた。

「来？」

「伸、電話出なくてごめんね」

「来、辛かったな……隣にいてやれなくて……ごめんな……来」

「伸…」

私は、また泣いた。

「来、俺、もうすぐ帰れそんなんだ。だから、もうちょっとだけ待つててな」

「え？ 帰れるって、もう現場終わり？ って事？」

「うん、やつと…」れでずっと来と一緒にいられるから

ずっと一緒にいられるから…

そう言ってくれた。

別れなくていいんだね。伸…

ありがとう…

伸がもうすぐ帰つてくる事で、弱つていた私の心がどんどん元気になつていぐ。

すごいね。

やつぱり、伸の存在は大きいよ。

私は、自分の家に帰る決断をした。

お世話になつた由那の両親と由那へ感謝の気持ちを込めて、夜ご飯を作つて食べてもらつたら、凄く喜んでもらえて…

「来ちゃんは、由那と違つて、いつでもお嫁に行けるね」

そう、お母さんに言つてもらつた。

そして、帰り際に…

「来ちゃん、嫌な事があつたら、いつでも来なさい…また、一緒にご飯食べよつな」

お父さんがそう言つてくれた。

ありがとう。

由那と由那の両親にも、いっぱいいっぱい元気をもらったね。

それに、家族つていいなって、思わせてくれた。

感謝感謝だよ！！

私は、覚悟を決めて自分の家に戻った。

予想通り、近所のおばちゃん達に白い目で見られたけど、不思議と
冷静でいられた。

こそそと私の話をしているおばちゃん達に…

「心配かけました」「

と笑顔で話しかけた。

おばちゃん達、かなりびっくりしてたな。

でかしたぞ！来！！

つて、感じ。

私は、なんとか父親の事を吹っ切って、伸の帰りを待っていた。

そして、いよいよ今日、伸が帰つて来る。

長い長い半年だった。

色々あつた半年だけど、伸が半年で帰つて来てくれて良かった。

朝から落ち着かない…

久しぶりの伸。

これからは、ずっと一緒にいれる。

早く会いたくて、会いたくて待ち切れないよ。

伸…

私は待ち切れなくて、伸の家の前まで来てしました。
なんだか、こういうのって、ストーカーっぽいよね？？
自分の彼氏だから、ストーカーじゃないよ！

「来！」

伸：

「おかれり！」

「どうして、ここにいるんだ？来の家で待つてくれて良かつたのに…」

「うん、待ち切れなくて来ちゃった」

伸はびっくりしていただけど、すぐに優しい顔で微笑んでくれた。

「ありがと…来」

もう離れなくていいんだね。ずっと、ずっと一緒にいられるんだね

伸：

私達は、話しが尽きなかつた。

いっぱい、いっぱい話しをした。

伸と一緒にいられるだけで幸せだなと感じじる。

伸：

あなたは私にとつて、もう手放す事のできない、とても大きな存在になつてしましました。

大好きだよ。伸…

私は突然伸に抱き着いてしまつた。

「来？」

「ごめんね。少しだけこうしていい？」

「うん…来、そのままでいいから話し聞いて「何?」

「一緒に暮らさないか」

「え?」

「一緒に住もう。俺、今回の現場に行って、少しだけど仕事に自信が持てるようになつたんだ。今なら、来も仕事も両立できる気がするんだ」

「本当?」

「うん、前から、一緒に住みたかったんだけど、今の自分じゃ、まだダメだと思って我慢してた」

「嬉しい…伸。私もきちんと仕事見つけて頑張るね

「来は、色々あつたからゆっくりでいいからな」

伸がそんな事を考えていたなんて…嬉しかった。

私達は次の日から一緒に暮らし始めた。
何もかもが新鮮だった。

朝は掃除をして、日中は仕事を探しに行き、夕方から食事の準備。
私には十分過ぎるほど、充実した毎日だった。

伸は、たまに友達や職場の人と飲みに行くけど、それ以外は、仕事が終わると真っすぐ家に帰つて来てくれた。

まるで新婚生活のような楽しい生活。

大好きな人といつも一緒にいられる事が本当に幸せだった。

そんな楽しい生活も一ヶ月を過ぎた頃、私は面接に合格し、就職が決まった。

前のような事務の仕事はもう無理だろうと諦めていたけど、落ちるのを覚悟の上で、建設会社の事務を受けた…んだけど、見事！合格！！

幸にも、私はパソコンを使いこなせた。

前の会社で、一から教えてもらつたから…

パソコンを使いこなせる人じやないと仕事にならないつて事だつたから、合格したのかな…

仕事が決まって、なんだかとてもゆっくりした。
なんとなく、伸に悪いなつて思つてたから…

だけど、今の私は、仕事が決まったからと言つて、喜んでばかりもいられないんだよね。

最近、気になる事があつて。

私の思い過ごしならいいんだけど。

毎日、夜中に伸の電話が鳴るんだ。
伸は寝てて出ないんだけど。

すごい嫌な予感がして仕方がない。

もしかして、この電話は女？そう思つてしまつ。

それでも、伸はいつも通り優しいし、私を嫌つたり避けたりする様子もないから、気のせいだ！そう自分に言い聞かせていた。

だけど…

それは、全然気のせいじやなかつた。

由那からの一本の電話で伸が浮氣をしているという事実を知らされた。

「来、今から言つ事間違つてたらじめん。でも、どうしてもだまつてられなくて…」

「どうしたの？」

「昨日、居酒屋で伸君見たんだけど……女人の人と一緒にいた」

「……」

「友達もいっぱいいたから、一人きりじゃなかつたけど……でも、ちよつと親密な感じだつた」

「そつか」

「そつかって、来、もしかして知つてたの？」

「なんとなくね、確信がなかつまし、認めるのも怖い気がしてたけど、これではつきりしたね……」

「どうするの？」

「伸に聞いてみるから」

「隠すに決まってるよ」

「そつかな、もう少しだけ伸を信じてみる」

「来……分かつた」

「由那、教えてくれてありがと」

伸：

本当に浮気してるの？

もつ、私じゃなく違う人を好きになつてしまつたの？

どうして……

私達、半年間もの遠距離 を乗り越えて、やつと一緒にいたられるようになつたのに、どうして？？
これから先には、幸せだけが待つてゐるはずなのに……

初めて伸に怒りを感じていた。

きちんと伸に確認しなきゃいけない……

私は伸話しがあるから、仕事が終わつたらすぐ帰つて来て欲しい

とメールを打つた。

伸の口から、事実を確かめるまでは、信じじよつ。
もしかして、何かの間違いかも知れない…

二時間後、伸は帰つて來た。

「来…どうした？」

「伸、いつも夜中に電話かけてくる人誰？もう、他の人を好きになつちゃつた？」

「突然何？」

「由那から、伸君が浮氣してない？って電話が來た。私も夜中の電話の事が気になつてたから…」

「来が言つ浮氣つてどこからが浮氣？」

「思い当たる事、あるんだ」

「職場の皆と飲みに行つた時に仲良くなつた人はいる。でも、二人で飲んでた訳じゃないし…これつて浮氣なの？」

「夜中に電話かけてくる人もその人？」

「うん」

「電話番号交換したんだね」

「ごめん…」

「伸は私とその人、どつちが好き？」

「来に決まつてる」

分かんない。

「なんで、私を好きだと言いながら、他の人に電話番号教えるんだろ。私は隠れて、電話してるんだろうね。」

「私と付き合つてる事はその人、知つてるの？」

「知らない…言つてないから。ただ、仲良くしてるので、恋愛感
情はお互ひないから」

そんな訳ないじゃん。

伸の事が気になるから、いつも電話かけてくるんだよ。
伸だつて……

「ごめん、伸。私、伸の事、信じ過ぎたみたいだね。これを浮気と伸が思わないなら、私はもう無理だよ」

「何言つてるんだよ来、こんなんで別れる気なのかよ！」

「こんなんで？これからも伸は平氣でこういう事するんだろうね、私はばれない様に、深い関係にならない程度に他の女人の人と遊ぶんでしょ」

「来、お前が心配する様な関係じゃないって」

「じゃあ、その人に聞いてみていい？名前教えてよ」

「佐伯美果」

え！？今、なんて言ったの？

美果ちゃん……なの？

なんで、なんで、よりによつて美果ちゃん？

「その人何歳？」

「俺の一つ下」

間違いない……

美果ちゃんだ……

私は目の前が真つ白になつた。伸はただの仲の良い友達だつて言つてたけど……

美果ちゃんは違う……

本気だよ。伸……

私はすぐに美果ちゃんが伸を友達以上に思つてると分かつた。

あの、美果ちゃんが…

伸を…

今まで彼氏も作らなかつたのに…
自分から男の人に電話なんて絶対かけなかつたのに、伸にはあんなに電話をかけてきた…
伸を好きになつたんだ。

なんで、相手が美果ちゃんなんだ。

しかも、伸の彼女が私だつて事を美果ちゃんは知らない…
美果ちゃんに、伸を合わせた事なかつたもんね。

こんな事になるのなら、合わせておくべきだつたな…

私、どうすればいいんだろ。

このまま隠し通す訳にもいかないし…

絶対、美果ちゃんとの仲がおかしくなつちゃ いそい。

伸の事で元気がなかつた時、元気つけようと私を飲みに誘つてくれた優しい美果ちゃん。

そんな美果ちゃんを、伸の事で辛い思いをさせてしまつんだね…

「来…」

「伸の軽はずみな行動で傷つく人がいるんだよ」

「『めん…もう、一緒に飲まないし、電話番号も削除するから

伸はそれで済む事なんだろうけど…

私と美果ちゃんにとつてはそんな簡単に片付けられないんだよ。

「伸…遊びたい時だけ楽しんで、私ににばれたら相手の人を捨てる
なんてするくない?」

「んじや、どうすればいいんだよ…」

伸の顔が険しくなる。

その顔を見たら、更に頭にきて仕方がなかつた。

「伸、美果つて、私の友達…前の会社の子なんだよ。私が伸との遠距離恋愛が上手く行かなくて悩んでた時、励ましてくれたのが美果ちゃんなの」

「え？？嘘だろ…」

「嘘であつてほしいよ」

「でも、本当に来が思つてゐるよつたな関係じやないから」

伸だけだよ、そんな風に思つてるの。
美果ちゃんは、私と知り合つてから今まで、誰とも付き合つてない
し、誰も好きにならなかつた。

それどころか、自分から電話なんて絶対にかける子じやない。
でも、伸にはあんなに電話をかけてきた…

美果ちゃんは、伸に恋をしてるんだよ。

「「めん、今日は自分の家に帰る」

「来…明日もう一度話しそうよ」

「話す事なんてもうないよー伸にがつかりした」

それから三日間、伸とは連絡を取らなかつた。

電話に出てないだけなんだけどね…

伸にはきちんと反省してもらわなきや。

”来、きちんと話しつけて来たから、電話に出てくれよ”

伸からの初メール。

電話に出ないとメールくれるんだ…

メールなんて面倒…って言つてたのにね。

私は話しつけたと言つ話しを聞きたくて、伸に電話をした。

「来…良かつた電話に出でれて」

「話し聞かせて」

「来と付き合つてゐつて事と、電話ももうかけないで欲しいつて言った」「美果ちゃんの反応はどうだった?」「相手が来つて事にびっくりしてた」

「それだけ?」

「今度からは、彼女がいるのに他の女に電話番号」を教えちゃダメだよつて注意された」

「やつぱり…美果ちゃんは、伸に電話番号」を教えてもらつた事で、伸に彼女がいなつたんだよ」

「うん、そうみたいだつた」

「伸の軽はずみな行動で私の大事な友達を傷つけたんだよ…」

「ごめん…来、戻つて来てくれよ。頼むから」

「伸は私の事、本当に必要?」

「当たり前だろ!もう一度と来を悲しませないから、もう一回だけ俺を信じてくれないか」

私はしばらく考えた後、伸の家に戻つた。すんなり伸の家に戻る自分もバカだと思つ。こんなに伸を許せないと思つても、それでも、伸がいないとダメな自分をバカだと思つ。

そう思いながらも、私はもう一度だけ伸を信じてみようと思つた。それから一週後、私は美果ちゃんに連絡をして、二人で飲みに行つた。

美果ちゃんは、私に正直に自分の気持ちを話してくれた。

美果ちゃんつて、すごいと思つ。自分が好きになつた人の彼女に、自分の気持ちをきちんと話せるんだもんな…

私なら、強がつて眞実を話せないとと思つ…

美果ちゃんが私に話してくれた事を簡潔にまとめると…

美果ちゃんは、伸の事を好きになつた。

伸の会社の人と美果ちゃんが幼なじみで、よく飲みに行つて、その人を通して伸と知り合い飲むようになつたらしい。

簡単に電話番号を教えてくれたから、彼女はいないんだろうな…と思つていたんだつて。

私の予想通りだつた。

美果ちゃんは、伸の事だけじゃなく、なんで今まで彼氏を作らなかつたのか…

その話もしてくれた。

高校の卒業式の次の日、美果ちゃんは子供を流産した。

妊娠が発覚した一週間後の流産。

まだ、将来旦那になる予定だつた人にしか妊娠の話はしていなかつたらしいけど、美果ちゃんは結婚＆妊娠＆出産…

その事ですごく不安だつた。

不安がいっぱいだつたけど、自分の中で生きている小さな命を殺す事はできなかつた。

産んできちんと育てようと覚悟を決めた。

けれど、子供の父親は産む事に反対した。

まだ、若いから…

そんな理由で、結婚も出産も諦めて欲しいと言われた…

そのショックからか、美果ちゃんは、精神不安になり流産。

子供の父親になるはずだつた彼は、美果ちゃんが産婦人科で涙を流していたのに顔も見せなかつたという。

彼とはそれっきり。

それ以来、美果ちゃんは男の人を好きにならないと心に決めた。

美果ちゃんにそんな辛い過去があつたなんて、知らなかつたな。

でも、そんな過去を乗り越えて、伸を好きになつたのに、またひどい終わり方…

「ごめんね、美果ちゃん。

それでも、美果ちゃんは笑顔だつた。

「来さん、ちゃんと幸せになつてくださいね」

そう言つてくれた。

ありがと…美果ちゃん

美果ちゃんの事があつて以来、伸は激しく私を求めてくる。

「来、週末に親父が帰つて来て、おやじと姉ちゃんと飯食べに行くんだけど、来も行こうよ」

「え！ いいよ！ 久しぶりに家族でゆっくつしてきて」

「なんで？ 嫌？」

「嫌じやないけど…」

「んじや、決まり！」

ちょっと、ちょっと、なんか話しが急だよ！

ついこの前まで、浮気騒動でゴタゴタしてたのに

週末に、伸の家族に会うなんて…

やつぱり、初めて彼氏の親に会つのは緊張するなれ……

「初めてまして、伸の父です。伸がいつも迷惑をおかけしてるので」「いえ、とんでもないです。あ……上北来です。宜しくお願ひします」「

私、緊張しまくり。

週末まで、日にちがあると思つて呑気に構えてたけど、あつという間に今日になつてしまつたよ。でも、伸のお父さんもお姉さんもカラカラして、居心地が良かつたな。

最初は”来さん”なんて呼んでたお父さんも、最後は”来”って呼んでくれたしね。

ただ、ちょっとだけ気になる余話してたんだ。

お父さんが伸に…

「これから先も、遠くの現場に行く事があるんだろ」つていうお父さんの質問に伸が

「うん」

つて即答してたんだ。

もしかして、また遠距離になつてしまつ時が来るの?つてすゞい不安になつたんだけど……

「来、今日はありがと」

「私も楽しかった」

「そっか…良かった」

「伸、これから先も、私達離れ離れになる事つてあるの？」
「多分…あると思つ。俺は富士工だから、全国何処へでも行かなきゃなんない」

「…」

「嫌？だよな」

「嫌つて言つより、無理だと思つ。私、そんなに離れるの無理だよ」「この前だつてちゃんと待つてくれたじゃん」

「だつて、もし、伸と結婚して子供が産まれたりしたら、私、一人でなんか無理だよ。それじゃ、私伸とは結婚できない」

「俺は、来との結婚、きちんと考へてる。だから親父にも合わせたし…無理だつて言われても、乗り越えるしかないだろ」

絶対無理だ…

この前、遠距離を初めて経験して、私には無理だと思つたしそれだけじゃない。

私、美香ちゃんの事もあつて、伸の事信じ切れてない気がする。

一緒にいても、浮気めいた事をした伸。

離れていたら、絶対不安に押し潰されてしまう。

絶対に疑つちやうと思つし…

単身赴任のお父さんを持つ家庭つて、よくやれるなあつて感心しちゃう。

すごいよね…

付き合つだけなら、なんの責任もないから、正直楽だよね！

いくら一緒に住んでるとはいえ、喧嘩をすれば簡単に自分の家に帰れるんだし、別れなければ、別れればいい。でも、結婚つてなるとそつはいかないよね。

まして、子供ができれば全て子供中心の生活になるんだろうし…

お金もかかるしね。

結婚つて、すげく憧れていたけど、これ自分が結婚を考えると、無理なんじゃかないかつて不安になる。

ただでさえ不安なのに、伸と離れて生活する事もこれから先あるんだもんね…

ますます不安だよ。

でも、これはどうしようもない事なんだよね。

それから、お互いにこれから先の事は口に出来なかつた。

でも、私は、結婚はもう少し後でいいんじゃないかつて考えるようになつていて。

確かに憧れはある。

だけど、今の自分じゃダメだ。

結婚はもう少し成長してから…

そう思つていた。

「来、話しあるんだけどちよつと座つてくれる」

台所に立つていた私に、伸が真剣な顔で話しかけてきた。

「どうした？」

「俺、仕事辞めようと思つ」

ええ…何言つてるの？

私のせい？私が、このまじや結婚できないとか、そんな事言つたら？

「なんで…あんなに頑張つてたのに。私は反対」

「でも、俺はこれから先も色んな現場に行かなきゃいけないと思つ

んだ。来は、離れて生活するの無理だと思つんだろ」

「そんな理由で、今まで頑張つてきた仕事辞めるなんて信じられない」

「それだけじゃない…今は富大工つて、貴重だと思う。でも、これから先は富大工の仕事は確実に減ると思うんだ」

「だったら、その時に辞めればいいでしょ」

私たちは、それから一時間も話し合つた。

伸と私は結局、お互いの考えている事が理解できなかつた。

私は、久しぶりに蓮斗に電話をして、伸の仕事の事を相談した。

蓮斗は…

確かに、大工職人の仕事は減るだろ…

でも、せっかく今まで頑張つて来たんだから、もつたいたいな。つて言つてた。

そして、来が離れ離れの生活に耐えなきやダメだぞ…つて…

蓮斗の言つ事はもつともだと思つた。

子供じゃないんだから、私がわがまま言つてる訳にはいかないよね。

帰つて、もう一度伸と話をしよう。

結婚して、単身赴任状態になつても、伸を信じるしかないんだ。

大変でも、伸がいない間は、育児も一人で頑張ろう。

少し、大人の考え方持てたかな？

でも、遅かつた。

伸は、今日仕事を辞めた。

私は、頭にきて伸の頬を思いきり叩いた。

涙が止まらなかつた。

悔しくて悔しくて仕方がなかつた。

そして、私は家を飛び出した。

もう終わりだと思つた。

伸：

ひどいよ。何で？どうしてよー。

私は許せなかつた。

その日を境に伸は変わつてしまつた。

毎日パチンコ生活。

お金がなくなればサラ金通い。

張り詰めていた糸が切れてしまつたんだね…。

もう、私の知つてる伸ではなくなつてしまつた。

こうなつたのは私のせいなの？

伸は、私がわがまま言つたから仕事を辞めたんだよね？

伸がこんなふうに変わつてしまつたのは、私のせいだ…。

私は、今の伸は嫌いだけど、どうしても、別れたられなかつた。

责任感じてたし、それに前の伸に戻つて欲しかつたから。

でも、伸は日に日に手がつけられなくなつていつた。

目つきも変わつてしまつた。

伸はいつしか笑わなくなつっていた。

私は、決心した。

伸ときちんと話しをしよう。

無駄かも知れないけど、このままではダメだよ。

私は伸の帰りを待つた。

そして、朝方伸は帰つて來た。

「伸、話したくて待つてた」

「何?」

伸は怖い目をして、私を見る。

悲しかつた。

いつもの優しい目はどこに行つたの?

「このままじゃ、私たちダメになっちゃうよ
その言葉を聞いて、伸は私に近寄つてきた。

「抱いて欲しいのか?」

「違うよ、何言つてるの伸

もう、私の声は聞こえていない。

伸は無理矢理私の服を脱がせて、強引に…
初めて、伸とのHを嫌だと思った。

そして、私はこの瞬間、伸との別れを決めた。

「伸、別れて」

それだけ言って、家を出た。

さよなら…伸。

大好きだつた伸。

腐つていた私を救つてくれた伸。

人を愛する素晴らしいさを教えてくれた伸。

ありがとう。

私はあなたに沢山の宝物をもらつたね。

あなたとの出会いを無駄にしないようこ

これからは生きていいくから。

心の中で伸に御礼を言つた。

一年間の恋が終わつたんだ…

涙で前が見えなかつた。

悲しくて、一生分の涙を出し切つてしまつた。

また、戻つてしまつた。

何もない私に。別れたいと思つたから別れたのに。

伸がない生活はつまらなかつた。

別れてから一週間…

伸の事を考へない日はない。

改めて実感する伸の存在の大きさ。

奇跡だつたのに。

伸という彼氏ができた事は、一生に一度の奇跡だつた。

その奇跡を私は大切にできなかつた。

一週間を過ぎても、二週間を過ぎても、私の頭は伸でいつぱいだつた。

毎日毎日、伸の事を考えて気付いた事があるんだあ
私、伸が一番辛くて苦しい時に、なんの力にもならず別れを選んでしまつた。

あの伸が、あんなに追い詰められていたのに…

伸は私との未来を考えて仕事を辞めたんだと思うんだ。
その私が、伸と別れる事を選んでしまつた。

私は最低…

今頃になつて、気がついた…

伸に会いたい…

伸の声が聞きたい…

伸…

ごめんね…

辛くて、悲しい毎日。

自分の家に帰つて来ても一人だし、伸が恋しくて仕方がないよ。

あの事件依頼、父親は家に帰つて来ていない。

叔母の話によると、住み込みの仕事を見つけて働いているらしい。

遅かつたけど、よつやくやる気になつてくれたみたいで安心した。

何気なく、父親の部屋を覗くとテーブルの上に、《来へ》と書いた手紙が置いてあつた。

何？一瞬、遺書？と思つて驚いたけど、普通の手紙だつた。

来へ

来、すまなかつたな。

今まで、来の父親という大事な役目から逃げていました。来から大事な母親を奪つてしまつた時に、自分が来を育てて行く覚悟を決めたはずなのに、来には悲しい思いばかりさせてしまつたな。お父さんは、いつの間にか来と向き合つ事ができなくなつていた。

でも、これからは、今まで父親らしい事が出来なかつた分、来の力になりたいと思つ。

まず、借金を返す為に、死に物狂いで働くから。

それが終わつたら、来の結婚資金を貯めるぞ！

伸君と来の幸せの為に、お父さんはお金貯めるから。

余計なお世話かもしれないけど、最後に言つておきたい事があるんで。

先日、伸君がお父さんの所に来ました。

面識がなかつたから、びっくりしたけど、来の彼氏だつて聞いたから、色々話し聞いた。

伸君は、来と別れたばかりだと言つてたけど、結婚する相手は来しかいませんと言つた。

今は、来に振られてしまつたけど、来にふさわしい男になつて迎えに行きます。

お父さんに、そう言つてたぞ。

伸君は、都会に行って働いてお金を貯めて帰つてくる。来が待つててくれるかわからないけどつて言つてた。

それから、伸君がお父さんの所を尋ねて来た理由だけ…

ただ、来とお父さんがきちんと向き合つて欲しいって…
それだけを言いたくて、お父さんの所に来たみたいだ。
来の事をこんなに大事に思つていてくれる人がいるなんて、お父さん嬉しかった。

来、どうか伸君の帰りを待つていて下さい。

父より

伸:

伸はやつぱりすごいよ。

人間の器が私と大違ひだな。

伸は元の伸に戻つてくれたんだ…
立ち直つてくれたんだ。

良かつた：

もつと、伸を信じるべきだった。
伸から逃げないで、待つべきだった。

一番大切な人を、信じて待つ事ができなかつた事が悔しくて仕方がなかつた。

だから、今度はきちんと待つていいよ。
いつ帰つてくるか分からなければ、伸を信じて待つていいよ。

そう決心した二日後、私に信じられない出来事が起こったんだ…

えへっつ。

赤ちゃんができました。

なんと、新たな命を授かつたの。

信じられないんだけど、本当みたい。

どうも、体調が悪いし、生理も遅れているから、半信半疑で産婦人科に行つたら、六週目に入つた所だつて。

多分、伸と別れた日、無理矢理体を求められた時だ…

あの時はすごく嫌だと思ったけど、今は素直に嬉しかつた。

伸が帰つて来るまで、きちんと一人で育てようと決めた。
だから、伸には連絡をしなかつた。

今、連絡をしたら、伸の決意が揺れてしまう気がしたから。
伸が帰つてくるまで、この子は私がきちんと育ててみせる。

なんだろ…

母親になつた瞬間に強くなれた気がするな。

それからの私は、人が変わつたかのように頑張つた。
まず、食事。

今までなら、一人で食べる食事は、適当だつたけど、今は違う。
バランスを考えた、体に良い食事をきちんと三食食べてる。

そして、酒も煙草も止めた。

母親になる喜びが、私を頑張らしてくれた。

五ヶ月に入ると、なんとなくすつきりしなかつた体調も、元に戻つた。

それと同時に、お腹も大きくなつてきて、赤ちゃんが動くのを感じる事ができた。

初めて、赤ちゃんが動いたのを感じた時、お腹の中で金魚が泳いでいる感じだつた！

おかしい例えなんだけどね…

日に日に大きくなる赤ちゃん。

今は、一生懸命名前を考えている所。

絶対、女の子だと思うんだよね。
名前を決めるのって、難しい。

あんまり、難しい漢字の名前にすると、書道の時に自分の名前を書くのが大変だらうな…

とか考えちゃつて…

でも、こんな何気ない時間をとても大事に思える自分が幸せに感じた。

伸：

今、何してるかな？

伸と別れて半年。

前に遠距離恋愛した時より、あつといつ間の半年だつたな。

きっと、一人じゃないからだよね。

それと、私が少しだけ大人になれたからかな…

相変わらず、伸とは連絡もとっていないけど、全然不安はなかった。
ただ、待つだけ。

今の私に出来る事は、この子と一緒に、伸の帰りを待つ事。

そして、無事にこの子を産む事。

それだけだから…

「由那お願い、迎えに来て…」

「え？ もしかして…」

「ダメだって、痛くて話せないから。お願いね」

「分かった。すぐ行く」

ついにこの日が来たよ。

伸：

正直、一人で怖いけど、由那が一緒にいてくれるって。

分娩室に入ると緊張と痛さで、おかしくなりそうだつ。

「来、外にいるから、頑張つてね」

「ありがとう。由那、悪いんだけどお父さんには、今の状況伝えてくれる？ 何も知らないから、かなり驚くと思つけど…」

「OK！」

お父さん、びっくりするかも…

だって、心の準備もなくおじいちゃんになるんだからね（笑）

最近は、お父さんと呼べるようになった。
少しづつだけど、親子になれてきたかなって…

「ギャー、痛い、痛い」

私は、もう痛くて涙が止まらなかつた。
なんで？なんでこんなに痛いの？

出産の痛みは想像を遥かに越えていた。

お母さんって、強いはずだよ。

こんな痛みを乗り越えてるんだもん。

私は、泣いて叫んで、やつと我子に巡り逢えた。

超可愛い…

赤ちゃんって、こんなに小さいんだ。

初めて会つ自分の赤ちゃんに感動した。

助産婦さんに

「お疲れ様…こんなに暴れたお母さんも久しぶりだった
なんて言われちゃつた。

いやいや長かつた。

でも、十時間の安産なんだつて…

安産つて言われた瞬間、自分の耳を疑つてしまつた。
こ、これで安産なの？つて感じなんだけど…
自分では、絶対に難産だと思っていたのに…

なんだか、やっとげた達成感と疲れで、私は眠ってしまった。

どれくらい眠ったのか、目が覚めると個室に移されていた。

「由那？」

「来、お疲れ様。それにしても、すゞしく叫び声だったね。あの声聞いたら私、将来、子供産むの怖くなつた」

「聞こえてた？」

「かなりね」

「来…」

え？？？

伸… 伸なの… どうしてここにいるの？

「伸… どうして」

「来、お父さんから連絡もらつて、すぐ駆け付けた。「めんな俺…」「私…」そごめん。伸が一番辛い時、私、伸から逃げた。すごい後悔して…でも、お父さんから、伸の事聞いて、私、伸を待とうつて決めた」

「一人にしてめん。しかも、子供の事も知らなかつたし、本当にごめんな。でも、ありがと」

いつもの伸だ。

「俺もおじいちゃんか…なんか照れるな

お父さん、顔が子供みたいにくしゃくしゃにして喜んでくれた。

ありがとう。

名前は『来花・らいか』

勝手に私が決めたけど、誰も反対しなかった。

お父さんと由那が帰った後、伸と一人で色々な事を話した。

今、伸は介護の資格を取つて、老人ホームで働いている事。これから、じつちに戻つてきて、就職できる老人ホームを探そつと思つてゐる事。

二人の結婚式の為に、一生懸命お金を貯めている事。

でも、全部自分一人で考へてゐる事で、帰つた時に私に受け入れてもらえなかつたらどうしよう…
とウジウジと悩んでいた事。

そして、何より、自分の子供が産まれた事にビックリしてゐる事。

そんな話しが照れ臭そうにしてくれた。

「来、色々迷惑かけたけど、俺と結婚してもらえない?かな…」

伸：

私は、ビックリして声がでなかつた。
「…本当?私、伸のお嫁さんになれるの?」「なつて欲しい…」
「うん、喜んで」

色々あつたけど、ついに伸のお嫁さんになれるんだあ…

夢みたい。

今はまだ、結婚式は上げれないけど、いつか必ず上げよう約束した。

お父さんも、とっても喜んでくれた。

由那も直も、蓮斗も陸矢も本当に喜んでくれた。

退院後に、私たちは婚姻届けを出して、夫婦になった。
紙切れ一枚で、夫婦になれるなんて、なんか不思議な感じもしたん
だけどね。

そして、私達の新居は…

伸の希望で、私の家になった。

お父さんが、帰つてくる日の為に、ここに暮らそう。
そう言つてくれた。

ありがとう。伸。

来花が産まれてから、三週間後、伸は就職先の老人ホームが見つかり、働き始めた。

私は、初めての育児に悪戦苦闘しながらも、新婚生活を満喫していった。

そして、来花の一歳の誕生日の日に私達は結婚披露宴を上げた。

思つたより、ずっと早く結婚披露宴を上げれた。

お父さんが、借金の返済をしながらも、私の結婚資金を一生懸命貯めてくれていた。

それに、伸も。

由那は私の為に、ドレスを作ってくれた。

由那らしい、この世に一つしかないドレス。

蓮斗達は、手作りの披露宴を用意してくれた。

私は感動して、最初から最後まで泣いていた。

あまりに泣く私を心配そうに見る来花。

私は、本当に幸せだ。

伸だけじゃなく、友達にもこんなに助けられてるんだから。

披露宴の最後…

お父さんへの感謝の手紙を読む時、私は、今までのお父さんとの色々な事を思い出し、泣きすぎて全然読めなかつた。

代わりに、読んでくれた伸も、途中から大泣きだつたし、お父さんも涙で顔がぐちゃぐちゃ。

それに吊られて、周囲も大泣き。

会場はすじい事になつていた。

それでも、私は必死に涙をこらえて、お父さんに伝えた。

「これからは、言いたい事はきちんと言える親子にならうね。お父さん、今まで」「めん…なさい。そして、ありが…と…」「

言えた。

今まで、言えなかつた、「めんなさい」の一言。

私、今更、気がついたんだ。

人と人は心の中で何を思つても、言葉にしないと 相手には伝わらない。

あまりに相手を許せなくなると、いつの間にか口も聞かなくなつてしまつけれど、それでは溝が深まるばかりなんだよね。それが、私とお父さん。きっと、きちんと話しができれば、自分の思いが相手に伝わつてたら、私はお父さんを刺そつとしなかつたはず。

話し合える機会を作つてくれたのも伸。

腐つていた私を救つてくれたのも伸。

人を愛する素晴らしいを教えてくれたのも伸。

感情がなかつた私が、こんなにも感情豊かになれたのも伸のお陰。

そして、何より、こんなに素敵な家族が出来たのも伸のお陰。

伸に出会つてから四年。

伸は私にこんなに沢山の宝物をくれたね。

あなたに会えた事。

それが私にとって、一生の宝物だよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1063d/>

あなたがくれた宝物

2010年11月15日17時13分発行